

東京市の場末の低地に建てられたアパートの内部。  
夏から秋へかけて。

第一場は一階で、第二場と第三場は二階で、第四場は三階の屋根裏部屋で、しかし全四場を通じて場景は殆ど同じ。僅かに廊下の勝手や階段の附き方の相違と、第四場に於ては天井の傾斜等、及び窓から見える外景の相違だけで階のちがいが示される。

全四場を通じて、ひどくガランとして薄暗い。廊下の奥ほど昼間でも真暗である。粗末な木造建築なので風が吹くと建物のどこかでヒューンと鳴ったり、ガタピシいたり、キーキーと泣いたりする。風が強いとワサワサとアパート全体がゆれるのである。

廊下の奥の暗い所を数の乏しい止宿人がパジャマをだらしなく着て黙ってウロウロするかと思うと、どこかの室でだし抜けにレコードが鳴りだし、それが時に浪花節であったり、ジャズであったり、又はベートーヴェンであったり、それらがポツンとやんだかと思ふと風がユーンとすすり泣くといった具合である。暑い時なのだが、家は広いし、薄暗いし、ヒンヤリとして殆ど夏やら春やらわからぬ、と云えば、各場が、昼やら夜やら、

チヨット見た眼には同様よくわからぬ。僅かに第四場だけが秋の午前で、ひどく明るいのみ。

1

一階、加賀一家の住いに当てられている室。八畳と六畳から成っているが、みえているのは八畳だけで、六畳は左手奥になっている。右手は広い廊下。廊下を隔てて、斜め向いに応接室のドアが見える。廊下の突当りは、玄関である筈だが暗くてよく見えない。八畳にはダンスと机とベッドが壁にピッタリ寄せて、それから大フロシキで被った機械のような物が左隅に置いてある。若い順一郎が頭から胸へかけて繃帯をし青い顔をして仰向けにねている。ベッドの上にはではなく、右前寄り廊下への出入口のドアのすぐ近くの畳の上にある。毛布だけは脚にかけているが身体の下には何もしていない。姉の亜子が黙って順一郎のわきの下など拭いてやっている。——二、三人の話声がしてくるのは筋向いの応接室の内かららしい。亜子と順一郎はその方を非常に気にしている。

……  
(間)

亜子 ……どう？ 少しは気分？ ……汗も大して出ないのね。なんか飲みたくはない？ お麦のよく冷えたのがあった筈よ、どう？ (弟の返事がよく聞えない) なあに？ いえ、大きな声を出しちやダメ。

順一 ……（かすれた声で） ……寒い。

亜子 寒い？ フトンをかければ苦しそうだし、困ったな。 ……じゃ温かい物でも飲みます？ クズ湯なら少し位いいんだって、先生いったわよ。どう、拵えようか？

順一 ゼラチン、みたいで、いやだ

亜子 そうね（微笑）あのイヤな匂いの奴、随分沢山のましてやったから。

順一 ……まだ臭いや。プフウ（ノドの奥で笑いかける）

亜子（自分も笑い出しかけて、あわてて）ダメ、笑っちゃ、順ちゃん ……（気を変えて）罰よ、あんた。いい気味だわ。

（二人共、応接室の方が気になって、耳をすましすまししているので、ともすれば話ごとぎれる）

順一 ……罰か。 ……以前、読んだ事が、ある。支那の、或地方では、下痢がとまらなくて死にそうになると、人間の糞を、むやみと沢山食う ……。

亜子 まあ、へーん！ そいで癒んの？

順一 知るもんか。 ……昨日からゼラチンを口ん中い、流し込まれるたんび、僕は、それを思い出していた。一つのドグマだもん。

亜子 順ちゃん、また、あんた！

順一 違うよ、姉さん、僕は笑っているだろ。

亜子 ……あんた、病気よ、立派な。

順一 ……姉さんは、薄バカだ、立派な。

(二人黙る。しかし雙方怒ったのではない。姉弟は何となく互いを憐れみながらマジマジと互の目をみつめ合っている。……永い間)

亜子 (微笑して) そう、どっちも本当らしいわね。乙骨の小父さんにいわすと…… (それ迄も二人の会話を縫って断続していた応接室の高調子で喋る声と、それにつれて起る二三人の哄笑。二人暫く耳を澄している。応接室の方は再び静かにボソボソ声になる。……)

順一 ……じゃ、ホントに、売るのは、姉さん？

亜子 さあ……。

順一 来てるのは、筧と、弁理士だろ？ ……どうすんだい？

亜子 (前の問いにはコックリで答えて) ……私もよく知んないの、…… (立って、何かをとり左手奥六畳の方へ去る。そちらで水道のセンをひねったらしく、水の音)

(順一郎は天井をにらみながら応接室の方へ聞耳を立てているが、よくききとれないので、身動きの出来ない身体をニジリうごかしてドアにピツタリ耳をつける。同時に応接室の人々の声が大きくなり、声の中から「高田印刷がどう頑張ったって、この許可さえこつちにとればもう……」 「それはそうです。いや、お祝いに、加賀さん、ひとつ……」 「ワツハハハハ」などハッキリききとれる。酒が少し廻ったらしい)

(水の入った洗面器を持って、亜子戻ってくる。足音で順一郎はドアから耳をはなす。亜子も息を呑むような風に黙って、順一郎と壁の間に洗面器を置き、壁の方を向いて、手拭を水にひたしては壁のシミを拭きはじめる。チラリチラリと弟の顔を盗みみるが、順一郎はムツとした顔をして向うの隅の、布で被われた機械をみつめている。姉の方を

見まいとすれば、自然その方に顔を向けているより仕方がないのである)

順一 ……母さんが……。

亜子 え？

順一 あすこんとこに寝たつきり、二年か……。あすこで、母さん、死んだなあ。

亜子 何をいうの順ちゃん！ 変な、片意地なことばかり考える……。姉さん、ホントに怒ってよ！

順一 そうじゃないよ、自分のこといってんじゃない。……。母さんが死んだ場所に、機械がおいであるから、あるとただいってただけだ。

亜子 馬鹿。

順一 馬鹿あ？ 馬鹿は知ってる……。 (はじめて姉の方をみて) へ、何をしてんの？ (亜子返事をせずゴシゴシ拭く) あ、そうか。姉さん、それ、うっちゃつといてよ。拭くな。あんな上まで飛んでいやがら。拭いちゃいかん、姉さん。……。僕は、考えを決めて置かなけりやならんことがある。……。なんか、そんな気がするんだ。

(間)

亜子 (拭く手をやめて壁に顔を押しつけていたが、すすり泣きの声を洩らし、子供の単純さで) 順ちゃん、もう、よしてよ。姉さんが、どんなことでもするから、もう、よしてね。姉さんが、順ちゃんのこと、こんなに好きなこと……。どこへ行くんでも一緒に行ったげる。だからね、一人はよしてよう。(泣く)

順一 ……ふん。(冷たい眼をギロギロさせて、真率な姉の訴えに乗って行こうとはせぬ)

(シャクリ上げている亜子……間)

(応接室のドアを押して加賀順介出て来る。後向きになり、室内に向って笑い、「とにかく、持ってきてきましょう、なに、スツカリそろっているから、ハハハ、チョイト失礼」といい、此方を向き、ドアを後手にドンと締め、鼻歌を唱わんばかりに上機嫌に廊下を歩いてきて、八畳のドアを開いて入ってくる。——永年の労苦と知識的労作が、明瞭に刻印されて、実際の年令よりもひどく老けてみえ、殆ど老人といってもよい姿。ロイド眼鏡と少し曲った背、灰白というよりも銀白に近い、美しいがクシを入れられないので、波うち乱れた頭髪。洋服の上に薬品のシミで方々の焦げた白いブラウス、少し酒を飲んで  
いる)

順介 エス、イスト、アイン、ポステイロン、エス、イスト、ポステイロン、エス、イスト、アイン…… (中音で唱い、次にそれが鼻歌になる。歌いながら、二人を目に入れずに、八畳を横切り、六畳の方へ入り、そこで金庫を開けるらしい音。亜子と純一郎は、その方をジツトみつめて  
いる。順介は二三の書類を持ち出して来て、右のタンスのところに行き、ひき出しを開けにかか  
るが、鍵がかかっている) おお。おい、亜子！ 亜子！ 鍵だ、鍵を持ってきてくれ！ おい亜  
子！

亜子 ……はい。

順介 あ、其処にいたのか、鍵を。

亜子 何をお出しになるんです？

順介 設計図だ。図面を青写真にしたのがあつただらう？

亜子 ……父さん、父さん、もつと……よく考えてから。

順介 考える？ 何を？ なに、チョイトお目にかけるだけだよ。鍵を出しておくれ。

亜子 鍵は父さんの腰にある筈ですけど。しかし、もつと落ちついて、父さん！

順介 え私の？ ええと、あそうか、あった、あった、ハハなるほど、もつと落ちついてか。

（ヒキ出しを開けて、黒い長い円筒をとり出す）落着けよ、なあ、亜子。ハハ。（それを持って行きかける）

順一 ……父さん！

順介 （振り返り、ズカズカ三四歩戻って来て、長男の顔を覗きこんで）順、どうだえ、具合は？

まだ青いなあ顔が。早くよくなるんだ。いいか、お前は父さんのたった一人っきりの男の子だよ。

（自分をにらみつけて、何かいおうとする長男の気持などまるで気にかからぬ程に上機嫌である）よし、よし、よし！（廊下に出て歌をハミングしつつ応接室の中へ消える）

（顔を見合わせている二人）

亜子 売るのね、やっぱり、順ちゃん？

順一 ……又「新入生の歌」がやって来た。

亜子 うそ！ それ、嘘よ。こんだ、うまく行くかもしれない。

順一 ……僕あ憶えている……。エス、イスト、アイン、……。

（二人が耳を澄すと急に応接室の方がシーンと静かになっている。——亜子、ファイと出て行こうとする）

（階上から足音がして、止宿人の金がかバンを下げて、右手の階段をトントン降りてく

る。前後をチョット見廻してから、八畳のドアを叩く。亜子、内から開ける)

金 モシ、加賀（カカときこえる）さん」

亜子 あ、どなた？ はい ㄥ（同時）

金 ああ、あの僕、もう行きます。それれ、お礼をしようと思つて……。

亜子 ああ、そうでございますの。それでは、どうぞお大事になさつて。お国へお帰りなんですつて？

金 あなたに大変お世話になりました。お主人にも大変お世話になりました。イノチを助けて貰つたです。それれ学校卒業する迄居らせていただくつもりでした。それれすが……。

亜子 いえ、そんなご遠慮には及びませんわ。あんなこと、何でもありません。……それに、このアパートの経営も私共の手をはなれて、一昨日から算さんの方に移つたので、主にお孝さんがなさることになりました。

金 あの妖魔ヤオモ！ オテカケさん！ ……それ嘘です。

亜子 嘘ではありませんの。現に私共も四五日内に此処を引払つて二階に引越すことになっております。もう只の止宿人ですわ。あなたの室のあとに行くことになるかも知れません。（微笑）

金 そですか。……（フイに流れ出してくる涙を拭いて）ああ！ この世の中、正直で愛のある人、泣かねばなりません。ああ！ 愛のある人勝利するの、神の国だけです。……（気を変えて）ではどうぞカラタを大切にして下さい。さよなら。

亜子 どうぞ、あなたも道中お気をつけて下さい。

金 ご親切決して忘れません。それから、僕、帰国するというの嘘です。ほかのアパート行きま



す。あなた方、ご主人でなくなったので、いってもよいと思います。……僕、このユーレカ荘、こわい。別に何もこわがることない。しかしゾクゾクする、勉強できないのです。

亜子 ……わかります。

金 わかりますか？ ユーレカというのはギリシヤ語、私知っています。見つけた、というのです。私達は幸福を見つけなければなりません。心の平和をみつけなければなりませんね？

…それは、さよなら、さよなら。(五六歩行きかけ、再びツカツカ戻って来て、ニコニコしながら) ……僕の室のあと、おいでになるなら南京虫さんいない。安心しておいでなさい。はじめ沢山居らっしゃいます。それ、僕南京虫さん出ないように祈りました。もういらっしゃいません。ハハハ。ハハハ。さよなら。(廊下を玄関の方へ去る)

亜子 ホホホホ、さよなら。(チョット見送っていた後、ドアをしめて室に入る) ホホ。南京虫さんいらっしゃいません。

順一 いい人らしいな。クリスチャンか。

亜子 カトリックの方らしいわ。肺炎になった時に少しお世話してやったの。……愛のある人勝利するの、神の国だけです。

順一 今、止宿人何人位いるの？

亜子 せいぜい十人位なもんじゃないかしら、三分の二位空いている。こないだから出て行く人ばかりですもの。名前がよくないのね。近所では幽霊アパート、幽霊アパートっていつているのよ。

(階段に足音がして女の声で「金さん！ 金さん！」と叫びながら降りて来る丸鬚に結

った三十四五才のお孝。青い顔の美しい女。孕んでいるらしい。手に帳簿と電球を握っている)

お孝 金さん！ 待って下さいよ！ あれでは、あんた困るじゃありませんか！ ガラスがもう一枚……（叫びながら廊下を小走りに玄関の方へ消える。既に靴をはき終った金の効き腕をいきなり引搦んだらしいが、薄暗いのでよく見えない。声だけハッキリ聞える）金さん、困りますよ、黙って行かれたんじゃない！ 右側の窓の上の隅のガラスが、スツカリ二つにヒビが入っているじゃないませんか！ 黙って辨償もしないで行ってしまうなんて、ズルイじゃないか！

金の声 あれは、僕知っています。

孝の声 知っている！ 知っていて、そいじゃ！ まあ、なんていう……！

金の声 僕割ったのではない。僕が、はじめて此処に來た時からヒビが入っていた。

孝の声 なんだって！ 何てえズーズーしいんだろう。はじめから割れていたなんてシラを切ったって、此方じゃ空いている室はチャント調べているんだから駄目です！ 辨償してもらいましょうよ。

金の声 仕方ない、ベンシヨします。だけど僕割ったのではない。

孝の声 払ってさえ下さりやいいですよ。

（二人の声が小さくなる。金が代金を支払っているらしい。顔を見合せている亜子と順

一郎）

順一 （静かになつたので別のことをいう）今日は乙骨の小父さん、二階にいるの？

亜子 描き上げた絵を届けに今朝出たつきり、又飲んでんでしょ。おきまりだ。

孝の声 （高くなる） どう致しまして！ いまどき、あのガラスが二十銭やそこらで！ 三十七銭です。三十七……（再び小さくなる。金が玄関を出て行く戸の音）

順一 ……「このアパート、こわい」か。ゾクゾクしない方がどうかしている。

亜子 応接、馬鹿に静かだわね。

孝 （ブツクサイいながら此方に出てくる。銭勘定をしながら） ……何をいつてやがんだいチャンコロめ！（ヒツソリとなっていた応接室に、この時又談笑の声が起る。お孝は既に応接室の前を通りすぎ、八畳のドアの前あたりまで来ているが、ヒョイと立止り、顔だけ振向けて応接室のドアを見つめていたが、廊下の前後を見、八畳のドアを振り返って見た後、ソツと足音を忍ばせて応接室へ歩いて行き、ドアに耳を押し当てて、内部の様子を立聞きする）

順一 ……姉さん、少しわきへ行って用をしたら、いい。昨日っから僕のそばに付きつきりじゃないか。

亜子 順ちゃんが、父さんや私の頼みを聞いてくれるという証拠をみせてくれないから。

順一 証拠？ ……こうして口をきいているじゃないか。フン。

亜子 又いうの……？

順一 そうじゃない。姉さん託児所の方へは行かないでもいいのかといってるんだ。

亜子 いえ、それなら頼んできてあるの、広津さんの妹さんが私の代りをやってくれます。

順一 ……広津の謙さんか。（姉の顔をジロジロ見る）

亜子 何をそんなに見るの！（赤くなっている）

順一 単純でいい人だなあ、立派な職工だよ。……しかしあれも（金の口真似）勝利するの、神

様の国だけ（二人黙る、亜子赤くなり下を向いている）

（お孝の立聞きをしている応接室のドアが内側からパツと開いて、ひどく上機嫌の順介が「チョット、では印を、ハハハ」といいながら出て来る。ハズミを食ってヒョロヒョロするお孝とぶつつかりそうになる）

順介 おっ！ こりや、お孝さんですか！ お孝女史か。ハハハ。失敬！（ふざけて不動の姿勢で挙手する）どうですか、天下の形勢は？ あんたはこれまで永らく管理をやってくれたんだから如才はなからうが、これで管理人としてやるのと、自分が主人になってやるのとでは、同じように違うだろうか？

孝 フッフ。いいご機嫌ですわねえ。まあ！ 天気が変わらなきやいい。加賀さんがこんなにハシヤイでいらっしやるのホントに何年にもない珍らしい……（とベラベラやりかけるが、その時、紙幣束を握っている順介の左手にヒョイと眼が止り、ギョツとすると同時に言葉を切つてそればかりジロジロ見ている）

順介 然り！ ハハハ、アイン、ツワイ、ドライ、ズドンとね。やあ、お高閣下、失敬！

（廊下を此方へ歩いて来る）ハハハハ。

（応接室の開いている戸口から笥一彦が現われる。卅五六才和服。身装が上品であるばかりでなく態度全部が柔和で、ネバリ気があり、見た眼には工場を所有している金融ブローカーといった所はまるでない。お孝にくらべても、二つ三つは年下に見える程である。口のきき方は非常に静かである）

笥 （お孝をみて）ああ丁度いい、お前今、手はあいているんだらう？

孝 はい……。 (と、打って変ったように従順である。それは殆ど奴隷的といえる程、畏怖と愛情の混り合った態度である。笥以外の一切の人間に対して彼女が示す態度が剽悍であればある程、笥だけに示す彼女の態度はそれとは完全な対照をなす。この変化は何の予告もなしに、余りに突然に来るので、見る者に眼まいを起させる)

笥 では、収入印紙を十円と五円、都合二枚急いで買ってきておくれ。金は有ったね？

孝 はい、私の方にありますから。……あのう。

順介 (八畳のドアを開けようとしているが、眼がチラチラしているものだから、ハンドルがうまく廻らず、二三度ガチャガチャやる) ハハハ、亜子、亜子 (ドアを開けて中に入る) 亜子！  
なには何処にあったつけ？ えーと……。

笥 (孝に) なんだい？

孝 いいえ、加賀さん、あんなにお紙幣さ持っていたらっしゃるのどうしたんですの？

順介 亜子！ 印だよ、実印は何処だったつけ？

笥 (孝に) よけいなことをきくもんじゃありませんよ。早く行つといで。

孝 はい。では……。 (小走りに玄関の方へ)

順介 (黙って自分を見ている娘に) さ、出しておくれ。

亜子 ……父さん！

笥 (いったん応接室の中に入ったが、再び半身だけ現わして) おい、おい、お孝さん！ ついでにビールを、もうあと一ダースいって。

孝 はい。

算 それから、あんた、三味線を室から持って来なさい。ハハ、いいだろう、たまには。（応接室の中へ消える）

孝の声 はい。（玄関を出て行く気配）

順介 なんだ？ いい、いい、わかってる。私だって、そんな、そんな、ウカツな人間ではない。自分の、この加賀順介の生命の一部分を処理しているんだ。そんなボンヤリもしていられない。ハハハ。さ、出しなさい。

順一 一部分ですか、父さん？

順介 わかってる。わかってる。さ、出しなさい。

亜子 出します。これは……（と帯にかたく結びつけて懐中しているサイフを出し、それから印のケースを出してやりながら）父さんの物なんですから。

順介 そんなに心配しなくてもよろしい。ハハ。何だえ、その顔は？ え？（と亜子の頤の下に指を入れて）それに売買契約の方に押す印ではないよ、今日のは。出願の證書だけさ。ハハハ。ああこれだ。さ、これ半分だけお前にやる。ホントはみんなあげたいが、父さんもあの機械を、あんな模型でなく、原寸大で一台拵えたいからな。で、これで託児所の滞納家賃と、そいから、差押えをお解き。

亜子 いません。

順介 だって、あんなに心配していたじゃないのか。子供達は……あの小さい狼達は、あのままだと、どうなるんだい？（握らされてしまう）

亜子 いません！ いません！

順介　ハ、ハ。まあいい、父さんの仕事にようやく目ハナがついたんだから、お祝だ。なあ、取っておくさ。お前があれ程打込んでいる託児所だもの、父さんの託児所でもあるさ。丁度、父さんの研究の仕事が、これまで永いこと、亜子のものであった、順一郎のものであった、ミドリ……母さんのものであったと同じことだ。

亜子　……（母のことをいわれて、こらえ切れずなり、畳に突つ伏す）母さん！　母さん！

順介　よし、よし！（泣く。しかしこれは嬉し泣きである。娘がどんな気持で泣き出したのかを察するだけの余裕を失っているので、亜子も嬉し泣きをしているのだと思いちがえている）　ハハハ。ミドリ！（涙をふいて、遠くをみる目つきをして）ミドリ！　……よし、よし。ハハハ。ハハハ、父さんにまかしておき！　よしよし！（室を出て廊下へ応接室へ消える。すぐあと、玄関の方から印紙を手を持って来たお孝も応接室へ消える）

（間——畳に突つ伏したままの亜子。　応接室からお孝だけがドタバタと出て来て小走りに玄関傍——管理人室だろうと思われる辺へ行き、再びすぐ出て来た時には三味線を抱えている。　応接室へ又すぐ入りそうにするが、それをよして、八畳のドアの所迄歩いて来て立間をしはじめる）

順一　……畜生！（低い、ゆっくりした声）……姉さん、泣くなといったら。（亜子フイと身を起して、黙って奥六畳の方へ立つ。その気配に、お孝は誰か出てくるものと思ひ、ドアの前から壁の方へスツと身を引くが、人が外に出てくるのではなかったことを知り、安心して、又、そのままの姿で暫く立っているが、室内では順一郎が一人で天井を睨んでいるきりで、物音のしよう筈なし。お孝は後ずさりにソロソロ応接室の方へ行きかける）

(順介の親友で洋画家の乙骨夏雄——ユツタリしたコールテンの洋服を着ている。一昔前の画学生といった身なりである。しかしボヘミヤン、ネクタイや、モシヤモシヤの長髪や変り型の帽子などが無いので、一見してそれと思われる画家臭味からは救われている。年令は順介よりも三、四才若いが見た所更にズツと若い。右のわきの下に、全紙のケント紙を筒にして巻いたものを抱え、右手には、油絵具の一ポンド・チューブを三本挿んでいる。少し飲んでいるとみえて陽気である。足取りも少しヒョコヒョコしている。外出から戻って来たらしく、暗い玄関の方から現われて廊下を此方へ来る。

後向になって歩いて来るお孝をみて、乙骨ギョツとして立ちすくみ、暫くお孝のするところをみているが、段々お孝が自分の方へ近寄ってくるので、お孝の背後を大きく輪を描いて避けてソツと通りかける。乙骨はお孝だけを特に、蛇嫌いの人が蛇に対するように、本能的にムヤミに怖れているのである——)

孝 (やつと乙骨に気がつき) ああ、あんたなの、乙骨さん!

乙骨 やあ。ぼ、僕だよ。ハハ。僕だよ。

孝 (テレかくしに笑って) いいごきげんねえ。

乙骨 (尻込みしながら) アハハ。いや、たまには僕だって、男児の鬱魂というやつでね、ハハ男児の鬱魂…… (チューブで顎の辺をなでている)

孝 (急に笑いを引込めて) びっくりするじゃありませんか! 黙ってさ、音もさせないで、人の後をウソウソ泥棒猫みたいに歩きまわって……。

乙骨 (ビツクリしてトビのく) いや、失敬々々、ぼ、ぼ僕あ、なにも、そんなつもりで……失



敬、失敬。（八畳のドアを押し入る。お孝はそのドアを睨んで立っているが、エモンの辺に手をやり、三味線を持ち直して応接室に消える）……や、ああ！ おお、順公、どうだい？ どうだい、いや暑い！ 彼奴は苦手だ。

順一 お帰り。どうしたの？

乙骨 泥棒猫みたいだと？ へん、自分のことだろう！ 暑いや、（コールテン服の襟をはだける。すると胸の肌が見える。シャツを着ていないのだ）いや、あのメカケさ。この室の前で立聞をしているんだ。鼠だ、鼠だ、大きな鼠だ！ というセリフがあるさ。メスの、ポテリンの、ドブ鼠め！ ホッテントットめ！ グツサリ刺してでもやらんきゃ、我慢ならんシロモノだ。

（当のお孝の前では小さくなっていればいる程、後になるとそんな相手と、同時にそれをそんなに怖がる自分に腹を立てて、無性に憤ガイするのが彼のクセである。トメドなく威張って喋る）  
うん、あん畜生！ ええと……ところで順公、どうだ具合は？ まだ動いちやいかんよ。なあ！ 人生というもんは、そいったものじゃない！ 死んでしまふ迄は、此方のもんだよ、切札は此方が握ってるんだ！ 切札の中に、命を叩き込め！ やっつける！ とっつかまえてねじ伏せて、料理しろ！ ハハ、そうじゃないか、え、ハムレット？ じゃなかった、ドンキホーテだったか？ どっちでもいいや、ハムレットよりや、ハムの方がうまい。単純だよ。亜子はどうしたい？  
順一 ……向うの室で、泣いてら。

乙骨 泣いてる？ 又か。託児所の道具が競売になるっていうんだらう。よし！ 僕に金がある！ （ポケットから紙幣やバラ銭を掴み出す。それを勘定する。勘定している間に、突然、非常に悲しそうな顔になってしまう。殆どベソをかいている）……フン、乙骨夏雄、馬鹿野郎。

……半月の仕事の代がこれだけだ。……（気を変えて）どれどれ。それにしても泣くって法はないさ。（六畳の方へ行きかける）

順一 小父さん、行っちゃいけない。放つとけよ、……それよりも、チョットそこの窓のカーテン開けてくれないかなあ。僕、空が見たい。

乙骨 そうか、よし、その調子だ。人は空を見なきやいかん。（カーテンを開けて外をのぞく）だが、もう駄目だよ。晴れてりや、まだ、あすこん所に一尺四方ばかり青く見えるがな。あ、そうだ、順公、青い空が見たいのだな？ よし見せてやらあ！ 青空も青空、生一本のゴッホの輝けるセルリアン・ブルーだ。（チューブを突出して、少ししぼり出し、指先に塗ってみせる）それ見ろ、順公、日本の今時の濁った空よりは、このチューブの中に、ホントの青空がある！

順一（乙骨のためによるこんで）ああ買えたね、小父さん！ 描けるね。ああ、いい色だ。いい色だ。あすこで窓から見た空に、こんな空があった。

乙骨 そうさ。チューブの中か、牢屋の窓だけにあるんだ、今時は。現代は少し恥じるがいいんだ。恥じるがいい。それ、ここにオークルとシルバーがあるよ。オークルで地面が描けるし、シルバーで光が描ける。これだけあれば十号が三枚やれる。……しかし、このオークルやシルバーの地面や光りも今じゃ、よごれている。うん、ドロンとなっちゃってる。ぼ、ぼ、僕あ絵具が買えると、先ず気が違いそうに嬉しくなつて、次に気が違いそうにむかつ腹が立ってくるんだ。うん！ 世の中あ、まちがっている！ 現にわれわれが発明家加賀順介を見よ。あんな、いい人間が今迄どんな目にあつて……俺あ……。

順一 小父さん。父さんは、又「新入生」を歌っている。

乙骨 なに？（急に顔色を変える）

順一 エス、イスト、アイン、ポステイロン。

乙骨 嘘だあ。……ホントかい？

（順一郎答えず。二人黙る。——永い間）

（応接室の方からファイに三味線が鳴ってくる。建物全体をゆすぶる風の伴奏）

乙骨 ヘッ!! な、なん……！（殆ど異変に出会ったように立ちすくんでいる）……。

順一 あいつのうしろからは、いつでも不仕合せがついてくる。

（この言葉のうちに六畳から亜子が出て来る。乙骨は眼を据え、三味線をきいてゐる）

亜子 小父さん！ 止めて頂戴！ お金を受け取ったんです。実印を持って行きました。よく考

えてみるように、もっと考えてからするように、小父さん！（この時、再び順介が、「新入生」

を鼻歌で歌いつつ応接室から威勢よく出て来る。前よりも酔っている。書類と印を握っている）

乙骨 ……いかん、いかん！ よし！（と、やにわにケント紙の筒を投げ出し、室を出て行こう

とドアのノックに手をかける。丁度外から順介がドアを開けるので、ぶつかりそうになる）おお

！ 加賀！ 加賀？ ああ、酔ってる！

順介 よう、乙骨、戻っていたのか。アハハ、万才だぞ、乙骨！ はあ、よろこんでくれ。酔っ

てる？ 酔うさ！ 俺あ嬉しいんだ！ 出願の方もできる筈だし、原寸大製作の費用もできた。

俺の、此奴が陽の目を見るんだ！ この子供が。そうだ、亜子、順一と、それから此奴だから、

俺の三番目の子供だ、これが世間に出て働くんだ！ 俺あ、涙が出る。嬉しくって！

乙骨 子供が世間に……（と意味なくいって、順一と亜子を代る代る見ている）

順介 そうじゃないか、乙骨！ 死んだミドリが先ずこのために泣いた！ お前も泣いてくれたなあ！ ミドリは生活の方を、一切切引うけて闘ってくれた。お前は世界中の絵具という絵具をとりよせて、俺の為に合成法まで調べてくれた。三人で抱き合って、此奴の上で涙をながしたことを憶えているかい？

乙骨 憶えてゐる！ おぼえているとも！ だから、だからさ、そんな有頂天に、軽率にやらないで、よく考えた上でこの前のような目に、それから、その前のような目にもあわんように。

順介 なんだって？ 何をバカな心配をしてるんだい？ 君まで、僕のことをそんな、ほうずもない阿呆だと思つているのか。アハハハ。此奴には、俺と、ミドリ、君、亜子、順一、この五人の命が打ち込んでいる。如何に僕がフヌケのボンヤリであつても、考えなしなことができると思ふのか。まあ、僕にまかしたときたまえ。約三個の特許がとれる。もつとも特許なんぞどうでもよろしい。特許などで保護される必要のあるのは単なる思いつきだ。俺のは計算だからな。思いつきは誰にでも真似られる。俺の仕事の根幹はそんなチャチなんじゃない。元来、金属印刷で改良の対象となるのは三つしかない。印刷される当の金属と、印刷する顔料と、せいから、印刷の操作のプロセスさ。重要なのは顔料とプロセスだ。俺の考えたのもその点だよ。どうだ！ 能率があがる。職工達の手数が半分以上はぶける。金ができる。死んだミドリが、どっかで、どんなに喜んでくれるだろう！ スツカリ売つてもいいんだ。弁理士にいわせると、それでも三万円位にはなるといふんだ。そしたら、そしたら……。

亜子 え？ じゃ、もう売る契約をなすつたの、父さん!! では先刻のお金は？

順介 違ふよ、あれは算の方から受取つたこのアパートの清算金の内金だ。ハハ、大丈夫だとい

ったら。

亜子 では、実印は、父さん？

順介 印は算君とは関係ない。出願の書類に押しただけだ。あんまり心配して、父さんを馬鹿扱いにしすぎると、父さん怒るよ。ハハハ、金ができる。そしたら、謙五とお前は結婚するんだ。そいから二人で消費組合も、あの託児所も、もっと大きくするさ。金はいくら使ってもよろしい。父さんは研究の材料費だけあれば、タバコ代と、そいからビールが月に三ダース買えれば、あと一文もいらん。ハハハ、どうだ、そうなれば、嬉しいぞ。嬉しいだろうで え？ 亜子、嬉しいだろう？

亜子 ……ええ、それは嬉しいわ、だけど……。

順介 その「だけど」はいらんよ。それはお前の悪い癖だよ。お前達の母さんは、あんなに私のために苦労しながら「だけど」とは一度もいわんかったよ。

乙骨 そ、そ、だけどさ、だけどさ、加賀！ ……（どういっていいかわからず焦っている。うまく言葉がでず腹を立て）順介！ 君あ、学者なんだよ！ 学者なんだよ、忘れるなよ！

順介 学者がどうしたんだ？

乙骨 実際の事あ、やれないんだ！ 君あ、少しモーロクした学者だぞ。だから、俺のいうのは……。

順介 アハハハ、何をいうつもりだい、夏雄？ ハハ。俺がモーロク学者なら、貴様あ、モーロク画描きだ。アハハハもうよい！ もうよい！ とにかく、金ができるんだ。そしたら君にも、あんな呪われたケンビ鏡を覗いちや、日がな一日、バイキンの画を描かないでもいいようにして

やる。そんな、そんな、画用紙なんぞ破いてすててしまえ！ 明日からキャンバスと絵具を山のよ  
うにあてがって、絵を描かしてやる！ 絵を描かしてやるんだぞ！ みんなに俺の金をやって、  
ホントーに心からやりたいと思うことをさせてやるんだ！ なあ、順一郎！（順一返事をせぬ）  
人間は、自分の本心からやりたいと思うことをやらなければならんだ！ どうだ!! 何だ、あ  
んなバイキンが！ バイキンが青い色をしていたって全体何だ！ 乙骨夏雄、貴様あ、偉大なる  
画家ではないのか？ 魂をもった芸術家ではないのか？ よし、よし、よし！ いくらでも材料  
は買ってやるから、雪のように真白なキャンバスに、先ず、そうさな、俺達のミドリの肖像を描い  
てくれ。遠慮するな、絵具をチューブからじかにグイグイ山のように盛りあげろ。そして俺の惚  
れていたミドリの、そいから実は貴様も惚れていたミドリの、先ず額から眼を描け！

（この辺で、応接室から四五枚の書類を握った筧が出てきて、ドアの外で順介のお喋り  
をニコニコしながらきいている）

乙骨 おお、俺あ反対だ！ 俺あ反対だ！

順介 反対？ ミドリに惚れるのに反対なのか？ 馬鹿野郎！ 俺がこれだけ惚れているのに貴  
様が惚れんという法はない！ 惚れていたんじゃないか、知つとるぞ！ もつとも、もうミドリ  
はいない。死んじゃった、畜生！ 惚れるのに反対とは何といういい草だ!!

乙骨 そうじゃない。そのことじゃない。うまく行きさえすれば文句はない。俺あ、何も……だ  
からさ、機械のことやこの家のことを、もつとよく考えた上で、もつとよく考え……（筧がドア  
を押しして笑いながら入ってくる）

筧 やあ、ハハハ、どうしました、乙骨さん？ 画は描けますか？

乙骨 画？ 画がねえ——（それに苦笑して順介に）ねえ、加賀、これは僕だけがいつてるんじゃない！

筧 だって、十年前の事を思いだしてご覧なさい、乙骨夏雄というのは天才だといわれた名前じやありませんか。私なんぞも解らないなりに好きだし、私の先輩の株の方で盛大にやっている男にも、これは又集める事の好きな人がいます、格好なのが出来たら、拝見さしていただきたいもんですなあ。とにかくお描きにならないきやいけませんよ。

乙骨 描いています。バイ菌の絵をね。来て下さりや、いつでもご覧に入れますよ。……（順介に）僕達の心配が、君にわからぬ筈はない！

順介 だから、私を信じて任せておけといっているんだ。

筧 何のことです？

順介 いや、機械の事をね。それから……実はこの家……とまあ、事情を知らんで、はたで見ていると心配するのも無理はないんでなア。

筧 そう、それはそうです。出願の経過中に項目が他へ洩れる例はよくある事ですからね。殊には、このプリント・マシンは、化学工程と物理工程雙方にわたつての改良だから。そうでしたかね？ いやあ、私だって工場を経営していりや、機械の事も少しは分りますよ。事実、直接すぐこの機械から恩恵をこうむるのは、私の工場なんですから。しかも、それも、もともと加賀さんが創立なすつた工場であつてみれば、それだけやっぱり加賀さんにしても可愛い訳でしょうからね。よつぽど慎重に運んでいただきたい。今度の改良機の処理如何では私の方も大打撃にならないとも限らるので、実は正直のところ、私だって心配しているんですよ。（応接室の方を顎で示し

て）あんな連中にかかっちゃ、失礼だけど、加賀さんあたりは赤んぼみたいなものでしょうから。私などが、頼まれもしないのに、何かとお話中に一座してあげるように心がけているのも、そんな訳です。どうですか加賀さん、あの連中のうしろにN・Y工業なんぞが、動いているんじゃないやありませんかねえ？ 仮にもそんな事があると、N・Yは臼田コンツェルンのバックをもっているし、主要な仕事軍需工業に関係している事もあり、話が少し面倒になって来ますがね？

順介 そんなことはない！ そんな！

筧 全部を三万で売らないかといった話など、じゃ、どんな風に解釈したらいいですか？ その話が嘘だとすれば、結局買う気なんぞ、どこにもないのに三万などと夢の様な値を立てておいて、費用をいくらでも沢山とろうとしていると考えなければなりませんね？ ええ、そうですね？ それ以外に解釈の仕方はありませんよ。

順介 ふーん……。しかし、まさか……。

筧 いや、これは私の老婆心までです。万々そんな事はありますまい。又及ばずながら私がついている以上、そんなへまはさせるもんじゃありません。ねえ、乙骨さん！ そうでしょう？

（乙骨返事をしない）ハハハハ。とにかく、三万が三十万だろうと、売買の話にはお乗りにならない事ですなあ。

順介 勿論ですよ。私が印を押してきたのも、願書の方と、委任状だけなんだから。

筧 あ、そうそう、印で思い出したが、ついからですから、ここにチョイと押しといていただきませう。此方は、工場の方の変更登録の最後のものです。ええとそれから……。

順介 よろしい。（読む）なるほど。



亜子 父さん！

筧 署名の方は先日やって貰いました。印紙の方にも、私のは済んでいますから、あなたのだけを。ああ、そこで結構です。（順介印を押す）……ええと、一部分は先程、お渡ししましたが、残金もなるべく早く、工場の株式のあなたの分の未払い込み分を含めて清算するつもりでございますから、ここの処は曲げてご承知下さい。（順介頭を押えて書類に目を通して）

乙骨 加賀、いいのか？ それを……。

筧 実は恥をいわねばわかりませんが、私の関係のオヤジの奴が、株価の関係で、よせばいいのに、二三の国粹団体に足を突込んだ事から、そうなる可他に沢山ある団体からもカランでこられたりして、裏で少し放漫な駒をさしたもんです。その穴理めやら何やらで、すぐにこのアパー  
トなども。

順介 では、あなたの手で又……？

筧 いや、そうじゃありませんが、とにかく、いつでも動かせるようにしとく必要があるんですよ。勿論、名儀は、この通りお孝になっています。ひとつお願いしますよ。

順介 どちらにしろ、もう私のものではないのだから。（印を押す）

亜子 母さんを思い出して下さい。父さん！ 母さんを思い出して下さい。

順介 何をいつている、お前は黙っていなさい。（亜子に自分の握っていた書類を渡して）これは大事にしまっておいてくれ。そんな顔をしなくてもよろしい。父さんだつてこれ程慎重にやっているんだ。（筧に）しかし、何だな、私の方も製作費やら研究費やら、まだいろいろいるんで、頭金の方はなるべく早くしていただきたいんだが。

筧 それはいう迄もありませんとも。じゃ、もう一応、あちらへ行つて、出願の方の話を。

順介 そうしよう。(筧と一緒にドアの外へ) 残金の方はなるべく早くしてなあ。でないともう先日から私んとこ一家は、止宿人になつとんだから、月末になつて間代も払えんことになるしねえ。ハハハ、お孝女史は、あれで相当やるからねえ、ハハ。

筧 ハハハ、いやあ、そりやいつときます。あれはどうも金の話になると、見境いがなくなつて……女子と小人という奴ですか、ハハハ。とにかく残金の方は至急に。

(話し笑いつつ二人は廊下に出て応接室に消える。その時開いたドアから三味線のヒビキがハッキリきこえる。すぐ笑声がそれにつづく)

(こちらでは二人が代る代る顔を見合せて沈黙——永い間。やがて乙骨が自分の額をなでコツコツ叩きながら室内を歩きはじめる)

亜子 私、からだがかんなにふるえる。(間)

乙骨 乙骨夏雄、お前は仙人だ！ くそ！ スピロヘータよりは尚悪い。……スピロヘータはとにかく作用を起し得る。お前は何も仕出かし得ない。バカ。……しかし案外これで万事うまく行くかもしれないのだ。心配する程の事はないかもしれないよ。そう、加賀は阿呆ではない。それに何度もひどい目に会つて少しは用心深くもなっている。

順一 ……小父さんは筧という男を知らない。第一小父さんでも父さんでも、自分という者を知らない。

乙骨 順公は、じゃ、自分を知っているのか？

順一 知ってる。知ってるから、こんな事して、動けないでいるんだ。

亜子 順ちゃん、又、あんた……？

順一 姉さん、その契約書見せておくれ。（亜子渡す。順一郎それをジッと見ている）

乙骨 知っていると！……「絵を描いて下さらなきゃいけません。天才だったぢやありませんか」。チエツ！ 知ってるとも、あん畜生！……しかし、しかし、万事うまく行くかもわからないんだ。

（乙骨の右の言葉の裡に、奥玄関の方から、オーバオールの上から背広を着て職工の謙五——二十六七、時には愚直な位素朴で口の重い男——が出てくる）

謙五 加賀先生！（ドアが開いているので）ああ、亜子さん、丁度よかった！

亜子 あ、謙五さん！ どうして？（ドアの所へ行く）

乙骨 どうした謙五？

謙五 今日は。（亜子に）加賀先生は？

亜子 父さんは今、ご用だけど、何か……？

謙五 丁度そりゃよかった。託児所の方がいよいよ怪しくなってきた模様で明朝あたり、どうも処分になるだろうって、実は、たった今、組合の常任の方からわかってきたんで、そいでどうしようかと思つて……。

亜子 困つたわねえ。……そいで子供達は？

謙五 子供はもう全部帰つた。炊事の小母さんと、松ちゃんが残つてるけど。なにしろ電気は来ないし、工場の方へ来て今相談してはいますがね。ううん、工場は私等今夜あ夜業なんだ。今、金が、三十両ばかりあれば半月やそこいら引っ張つて見せるって常任の方ではいつてくれるんです

がね。

乙骨　いかん、いかん、亜子を又いじめるのはよせ、謙五君！　君あ、君あ、亜子の亭主になろうという男じゃないか！　どうしてそういじめるんだ？　君あバカだぞ。もっと、もっと何とか頭を働かせろ、な！　箕さんに出して貰えばいいじゃないか。工場の従業員の子供が十何人も収容されてるんだらう？　それ位出すの、あたりまえだ。

謙五　僕あ亜子さんをいじめようとしているわけじゃない。どうしていいかわからねえんで、智慧を貸してもらいたいと思つてさ。オヤジあダメだあ。そりや何度も頼んで見たんだけど、ダメなんですよ。この下の公設市場の株がオヤジのものでしょうか？　そんな訳で消費組合の息のかかったものは目の仇にするんだ。そうでなくてさえ、消費組合も託児所も今にぶつつぶしてくれから見ていろというんです。脈はねえさ。下手するとヤブ蛇だ。

乙骨　今来てるぜ、箕さんはここに。

謙五　え！　そいつはいけねえ。（ソソクサと出て行きかけて）なんですってねえ、こんだ先生の改良なすった機械だと、型擦しと腐蝕と絵具とが、一度に一台でやってしまえるんだって？

乙骨　うむ、そんなこといつてたな。詳しいことは俺は知らん。能率があがるっていつてたぜ。君達の手間あ、だいぶ省けるわけだらう。

謙五　……手間あ省ける。そいつは、ありがたい訳だが……型擦しと腐蝕をどうして一度にやるのかなあ。だって先生、腐蝕というのは品物を薬液の中をくぐらせといて作用させることですよ。やれば薬液の中で型を擦すきりだ。

乙骨　それだ！　それをやるんだよ。

謙五 できっこねえですよ！ 腐蝕には時間がかかるし、第一、一度乾燥させねえじゃ駄目だもの。

乙骨 クドイなあ、そこが研究だ。すぐにできることを二年も三年も研究するかってんだ。

謙五 ……わからんなあ、へえ……（立ったまま考えている）

乙骨 急ぐんじゃないのか、君あ？

謙五 え？

乙骨 託児所のことだよ。

謙五 あ、そうだ。じゃ、とにかく（亜子に）後で又。（出て行く）

乙骨 ……ボンヤリするな、バカ。……（短い間）

亜子 そいで、どうすんの謙さん？（先刻父親から渡されて帯に突込んでおいた紙幣に手がさ

わり、つかみ出して、それを瞬間穴の開くようにみつめる）

亜子 そうね……（間。その間、亜子は三味線の音をうつつに聞きつつ宙をみつめている

……）……子供達……。うん、いいわ！ 謙五さあん、謙五さあん！ 待って！（呼びながら、

紙幣をつかんだまま、小走りに廊下に出て玄関の方へ消える）

乙骨 （呆然としていたが）……あああ！ フン。

（頭髪をモシヤモシヤ搔いて突立っている。順一郎は指の先についた青い絵具をマジマジみていて何もいわぬ——永い間）

乙骨 ……くそ！ なんて三味線だ！（イライラして四五歩、歩き出しかけるが、又フイと思いつってジッと立ちすくむ。三味線の音、風）

廿日後。午後おそく。

二階の隅の室——加賀一家が半月前に階下から引移って来て住んでいる。前にベッドの置いてあつた場所に、半分出来上りかかった原寸大の機械が、その一部分を布片で被われて置かれている。前場では奥の六畳の方に置いてあつた大きな長方形の仕事テーブルと五つばかりの椅子が持ち出されて左手寄り脚光近くに据えられ、雪白に洗濯されたクローズが掛つてゐる。その上に二三のまだ使わない食器や壺、廊下を隔てて、前場に応接室だつた所は、乙骨の室で、明け放つたままになっているドア口から二三の古カンヴアスが覗いている。薄暗い。二階のどこかの室でレコードが鳴っている。テーブルに向つて椅子にかけている乙骨と順一郎、乙骨は顕微鏡、鉛筆、ケント紙とギターを持参で此の部屋に順一郎の相手になりに来ているので、顕微鏡を覗いてはケント紙に向つて手を動かしている。順一郎はまだ繃帯をしていて、首を自由に左右に動かす事は出来ぬらしく、石の様に動かず、テーブルの上のギターの絃にさわったり撫でたりして時々音を立てる。

乙骨 全体、謙五の奴あ何の事を話しに来たのかなあ。彼奴と話していると此方まで頭がボンヤ

リして来るんだ。……直きに加賀が戻って来るし、戻れば今日は御祝いで飲むんだってってたら、それまで居れといつても、アノーとかソノーとかいって帰る奴だ。間抜けな……。

順一 ……御祝いの会が先月から、こいで四回か、いや五回になる。

乙骨 もういい加減に算の方でも残金渡すだろうさ。

順一 そんな、そんな、なまやさしい男じゃないや。

乙骨 だって、此方だつてこれ以上延びれば、受取った内金を叩き返して、此の家の売買契約取消す腹な事は、奴さんだつてもう知ってるよ。

順一 ……だつて、内金は使っちゃつてあらあ。新たに拵えようたつて……。

(間)

乙骨 ……少し暗くなったな、亜子も、もう歸つて来る。うん、ええと……。メートルがあがりすぎるつて、なかなかスイッチを入れないからな、畜生。……しかし妙だよ。段々に暗くなつて行くぶんには眼がそれにつれて馴れて行くのか、仕事はやれる。面白いもんだよ。肉体はそんな風に出て来るんだ。……精神も実はそんな風に出て来る。

順一 限度が有らあ。

乙骨 限度たあ、何だ？

順一 まっ暗ん中じゃ見えん。

乙骨 そりや、見えん。……灯をつけるさ。お孝の阿魔だつて、まっ暗になれば第一自分が困るよ。

順一 ……放つて置けば、今にまっ暗になる事がわかつていれば、いや、わかっているから、薄

暗い時分から、つけとこうというんだ。

乙骨　じゃ、あの鬼婆あを、ねじ伏せて、つける外に手はないよ。アハハハ。

順一　……ねじ伏せるより手はない。ハハ。（ギターの六絃を一度に強く鳴らす）

乙骨　（はじめて順一郎の顔を見て）ああ、なあんだ。僕は、ただ電燈の話をしているのに順公は亦哲学をやっているんだな。

順一　小父さんだって、哲学をやってる。

（間）

乙骨　……じゃ、まわりくどい事をいっていかないでチャンと話そうじゃないか。加賀だって亜子だって、僕だって順公を好いているんだぞ。そりゃ順公にもわかってるなあ？　そうだろう？

僕なんぞ、僕なんぞ（涙ぐんでいる）順公が赤ん坊の時に僕の腕に抱かれて、小便をたれた、その、小便のぬくみを、今でもハッキリ思い出せる。そりゃ、それというのが加賀のいう通りに、死んだミドリさんに僕あ惚れていたかも知れん。しかし、とにかく、順公は僕達の赤ん坊だったんだ……それが、こんな風に育って来た。いつの間に、どうしてこんな事になったのか、亜子は知らず、加賀にも僕にも、よくわからん。時代かも知れん。……とにかく。賛成しなかった。出来なかった。そんな考えで、そんな方法で、世の中が良い物に作り変えられようとは、どうしても思えなかつたからだ。僕達の育った時代が、旧いせいともわからん。仕方がないんだ、人はもう一度若い時代を生きなおす訳には行かねえ。しかし、少くとも、反対はしなかった。順公のやる事を、人間として信用していた。人間はホントに自分のしたいと思う事をやる必要がある！　必要じゃない、人間のやる事は、それ以外にないんだ！　「とにかく自分の思う所を、どこまで



もしっかりやって見ろ」と加賀も僕も亜子も、順公の事、そう思っていたんだ。そう思っていたのだのに……ねじ伏せる、という……ねじ伏せる事に、どこまでも骨を折って見せてくれない！ どうしてだ？ ……そりゃ、やって見て、しくじるのは、かまわん、男児の本懐じゃないか！ ところが、ところが、そうはしないであんな事をやり出す。なぜだい？ あんな、あんな、しかも、一度ならず、どうして自殺しようなどとするんだ！ え、順公、どうしてだ？ (ポロポロ泣いている)

(間)

順一 (少しも感情を刺戟されたいらしい調子はなく、話のしまいまで陰気な位冷静である) 此処で、僕の血管を流れていた血が、畳や壁の上を流れた、というだけの話だよ。……とするならば、本当は、先々月、はじめて、教誡師に頼んで久我さんに来て貰った瞬間だ。……問題はそんな所に在るんじゃない。

乙骨 だから聞いているんじゃないか、どんな所に在るんだ？

順一 俺達の頭の中には、光りで以てギラギラ照し出された世界が一つづつ生きている……いた。どんな小さな事をやるにも、そこから割り出してやる。でなければ、何一つやれない。

乙骨 結構じゃないか！ そうであってこそ、立派な事がやれるんだ。

順一 違う。いや小父さんのいう事がじゃない、自分のいつてる事が違うといってるんだ。

……その頭の中の世界を照し出している光りは、……どこから出ている光りだ？ ……自分の生身に叩き込まれた所から来てる光りなら、消えはしない。青物を食わないで、壊血病にかかった人間は眠っていてさえも緑色の野菜を食う夢を見るといいうじゃないか。……俺たちは反対に、夢

の中では壊れて腐って行く自分の身体の細胞の姿を見るんだ。……光りは、借り物であった、……（乙骨が何かいおうとするか、いえずに居る間に）そうじゃない、そうじゃない！ ほかの連中の事は知らん、自分だけの事をいつているんだ。……中で、僕は一年の余も、自分は何だろ、と、その事だけを考えに考え抜いた。……その間、僕より後から入って、そこで気が狂ったのがいた。それから、これは直接知らない男だが、同じ様な仕事をやっていたのが、粟粒結核でタッタ四十日位で死んだのがいる。発狂した男が叫んでいた。「俺はプロパカートルじゃない！ プロパカートルじゃないよッ！ お母さんッ！」……しまいに、呂律がまわらなくなつて、「バカ、お母さん、お母さんバカバカ」って怒鳴っていた。そのくせ誰も奴さんの事をプロパカートルだなんていつてやしない。……死んだ男は、雑役からの又聞きだけど、息を引きとる間際に「もつと生きたい」と医者に向つていつたそうさ。もつと生きたい……。そんな、そんな事を見たり聞いたり……。胸ぶるいをしながら、一年間、僕あ考えた。いろいろさまさまに考えた。あげくの結論、それが、ハハハ、簡単過ぎる。自分は何もまだ知らぬ小僧だ、ということだ。たったそれだけ。知るといふ事は焼きゴテをあてられる事だ。どこに、俺の上に、焼きゴテの当つた跡がある？ ……先ず、生きなければならん。そう思った。……いや、そうじゃない。生きたい、と思つた。……生きたい。……（顔を蔽うて嗚咽している乙骨）……して、こうして戻つて来た、グルリを見廻し、そこから、自分を振り返る。たら、生きられなくなつていた。僕なんぞの生きる瀬は、ない。内にも、外にも。

（永い間。全手で顔を蔽うている乙骨。——沈黙。沈黙の間を、割に間近かの室で止宿人が掛けているレコードの音楽が埋める。多分第九シンフォニーの合唱部の所らしいが、

蓄音機が悪くて廻転が不平板なために、音楽そのものは歪められ、部分的な効果は変に誇張されて響く——)

乙骨 ……よく話してくれた、順公。

順一 フフ。これだけじゃ何の事だか解りやしないさ。しかし、たったこれだけの事さえ人に話すのはこれが初めてだ……それも小父さんだから……。

乙骨 加賀には、どうして話せない？

順一 あいつには話せねえや。

乙骨 あいつ？

順一 ……死んで呉れればと思った。

乙骨 ど。どうしてだい!! え、どうしてだ？

順一 母さんを病気にし、死なしたの、父さんだ。姉さんをメチャメチャにしたのも、僕達みんながこんな事になったのは、父さんのおかげだ。発明が、何だ!

乙骨 だって発明を取り上げたら、加賀は空っぽの人間だぜ? いわば、それが加賀の生命だよ。

順一 だからさう思ったんだ。死んで骨になる迄は、父さんの夢は消えはしない。

乙骨 夢かい? 俺は夢だとは思わん。

順一 夢だよ。しかも近所に居る人間を一人残らず餌食にして食いつくさなきや、おしまいにならない夢だ。小父さんがそういうのは、小父さん自身も夢を見てるから……

乙骨 絵の事か? 馬鹿いえ! 芸術が何で夢だ? 夢であってたまるか!

順一 ……芸術が全部夢だといってんじやない。

乙骨 ぼ、ぼ、僕の芸術だけが夢だというのか？ ……よし、それならそれでもよい。事実、夢かもわからねえんだ。ハハハ、現に、自分の絵からは金が取れないで、バイキンを描いて食ってるんだから。しかし、しかしなあ順公、此処だよ、いいか！ 人間が夢を見なくなる。考えて見ても恐ろしいじゃないか！ 世界はどうなるんだ？ 世界という観念は一つの夢だぜ。いや、そうじゃない、世の中を押し進めて行くものは、いつも夢だ。そして、そんな夢を見てはそれを表現して行こうとするのが、インテリゲンツィアだ。実現の点で成功したり失敗するのは問題じゃない！ インテリゲンツィアは、そいだけの特権と責任を社会から負わされているんだ。

順一 小父さんは白樺時代の人間だ、みんな白樺流さ。

乙骨 白樺だろうと赤樺だろうと、大きなお世話だ。そう思うから、そういうまでだ。

順一 パリに一月居て直ぐ帰って来てしまったというのも、やっぱりインテリゲンツィアの特権と責任に關係が有るの？

乙骨 有る段じゃないよ、大有りのコンコンチキだ。パリ行きや、画の方でも何か、打込めるものが有りそうな気がしたんだ。行って見て違う。どうも違う。自分のホントに打込むべきものは何となくほかに有る様な気がする。とにかく、乙骨夏雄の生涯を打ち込むものは、こんな雰囲気の中にはない！ そう思った。そいで、ピストルを一丁買った。どういふ気だったかな、そいで次の便船で帰って来てしまった。……帰って来た……が此処にもない。……多分、死ぬまで俺あそれを捜すだろう。そいでかまわん。来やがれてんだ！ 夢——敗北——生活。ああ、神も悪魔も照覧あれ、だ。痛快じゃないか。順公だって、それだよ。

順一 だったかも知れん。しかし、現在は多分、それじゃない。

乙骨　へーん、そうかい？　よし、そんな事あいとして、これほど僕に話が出来る位なら、加賀にはとにかくとして亜子には何故いわん？　姉さんがお前の事どいたけ心配しているか知つていよう？

順一　姉さんには、わからん。

乙骨　馬鹿いえ、あれは偉い女だぞ。偉大なる鬼子母神だ。俺よりも加賀よりも、お前よりもあれは出来が良い。

順一　アハハ、一般にメスを支配するのは本能だ。姉さんの託児所熱も結局それだ。

乙骨　結構じゃないか！　本能以外には、どんなよい物を持っているんだ、人間が？

順一　本能はしかし重荷だ。呪いになる。今の世の中では。呪いになっている。姉さんが――

乙骨　違う。本能はいつも人間を救うよ。亜子と謙五の事は、お前なんかには、まだ、わかるものか、亜子の前に現われた男の中で謙五が一等立派な男だ。

順一　それは多分そうだよ。しかし……。先刻のインテリの夢も、じゃ本能なの？

乙骨　本能さ！

順一　小父さんは姉さんに惚れているからなあ。

乙骨　惚れているよ。その証拠に謙五の薄ノロヅラが憎らしくなる事があるからな。ヤキモチだな、アハハ、よし、よし！（ギターを取り弾きはじめる）老いたる牡狼のシットか、（ヒョイと立ち、出しぬけに歌い出す。ギターに乗って）恋人尋ねて、山を越える。（その後の歌詞はロシヤ語になる、チャンポンに）

（階段を昇り亜子が出て来る。ジミな洋装――純白のブラウスの上に紺のジャンバーで、

多分これは亡母からでもゆずられた物を託児所に行つて児童の世話を焼く時に着るのである。買物の包みを下げ、階下に足音を響かせない様に注意し、一二度階下の方を振り返りつつ階段を昇つて来て、踊り場の所に立ち止り、気になるらしく階下を覗いて見ている。）

乙骨 ……（歌）それでも、なつかしい、遠くの人（亜子が階下を気にしながらも歩み出している）……しかし、なんだよ、亜子は、そりや、弱い。頭もおそい。だが、結局に於て、僕達全部の中で一番出来のよいのは亜子だよ。こんな事いっても順公にはわかるめえな。

順一 わからなくって、ありがたいや。

乙骨 ……（歌）なつかしい遠くの人。（歌の中に亜子ドア開けて入つて来る。歌いつつヒョイと其方を見た乙骨がトタンに電気をかけられたように目を見開き叫ぶ）おおっ！（ギターから無意識に右手を離れたために、ギターの尻がテーブルに当りゴーンと鳴る）

亜子 ああビックリした、どうしたのよ、小父さん？

乙骨 ……（見詰めている）……ああ、お前か？

亜子 誰だと思ったの？

乙骨 うん。……（右手で額の汗を撫で、ギターをテーブルに置き椅子にかける）……いや、その洋服が悪いんだ。（頭をコツコツ叩く）……ミドリさんを、見た。

亜子 え、母さん!?!……（相手を見詰め、次に自分の身体を眺め廻し、次に背後を見廻したりする）……？

乙骨 アツハハハハ。ハハ。何でもない。ハハハ。馬鹿！ハハ。よし、よし、よし！（ギター

を鳴らす)

亜子 どうしたのよう！ どうしたの？ 私がどうしたの？

乙骨 何でもない。アハハ。いいよ、いいよ。

亜子 だって「何とかしたのは亜子だよ」って、先刻いつていたんじゃないの？

乙骨 ああ、あれか。ハハ。亜子は良い子だっていつてた。

亜子 嘘！ なんか悪口いつてたんでしよう。順ちゃんが「何とかで、ありがたい」……。

乙骨 ホントは、あれは馬鹿だつていつてたんで、順公が、「あんな馬鹿でなくつて、ありがたや」さね！ 少くとも謙五のアンポンタンと、あんな事に……。 (あわてて) 違う違う。そりや

冗談だ、何てえ顔をするんだ亜子！ いきなりベソをかいて、おい違うよ、そりや！ 嘘だ、謙五はいい奴だよ！

亜子 ひどい！ (プリプリして見せ、四畳半の方へ行きかける)

乙骨 嘘だ、あやまる。それ、歌を歌つてやる。かんべんしてくれ。コロガレ、コロガレ、ビール樽。な、な！ かんにん！ (床に坐つて手を突いてあやまる)

亜子 (振返つて) 今日は、おいしいローストビーフと、オランダのチーズ買って来たけど、小父さんだけには、あげないわよ！ (四畳半の方へ消える。買物包みを開らきに)

乙骨 (立つて) アハハ。トメテトマラス、モノナラバ、コロガレ、コロガレ……。 (ファイと黙り込み、先刻のドアの所をジット見詰めながら、コメカミの辺を指でこすっている) ……

亜子の声 (機嫌を直している) 順ちゃん、どう具合は？ ……あとで此のチーズの缶、切つてくれない？ 厚いから、私じゃ、駄目。

順一 うむ。……うん。（見るともなく、顕微鏡を覗いている）

（亜子出て来る）

亜子 父さん、まだ？

乙骨 うん、まだだ。

亜子 何をボンヤリしているの、小父さん？ ……ねえ、父さん所に、先日から手紙よこしてた何とか工業の技師の人此処に訪ねて来て、父さん会う筈になってるんじゃないかしら？

乙骨 N・Y工業？ 知らないぜ、僕あ。どうしようというんだい？

順一 捺染の方へ、父さんのこんどの機械を使おうと思って買収にかかっているんだそうだ。特許が一つも降りない内に、それごと買おうというんだろ。……弁理士の方から知っちゃったらしいや。

乙骨 お前どうして知ってる？ それを？

順一 十日ばかり前に僕此処に一人でいたら、怒って青い顔して戻って来た父さんが、一人でベラベラ喋って聞かした……どんな気だか。僕あ知らん。……勝手にするがいいんだ。

亜子 ああ、それは多分、牛込の山田の叔父さんちへお金借りに行ってことわられて戻って来た日だ。

乙骨 え、山田へ!? どうしたというんだ、加賀は？ 此の前の清掃器発明の時、あれだけいじめてペテンにかけて、そいで、横取りしちゃって散々甘味い汁を吸ってしまおうと、お前達とは今後義絶だなんぞといやがって何が親類だ。踏んだり蹴ったりされた連中の所へ、又候シツポを垂れて行くのかっ！ 恥知らず、加賀っ！ 又、ひどい目に会うぞ！ 又、ひどい目に会うぞ！



亜子　なんて大きな声を出すの、小父さん？　だから、それは私がよしなさいって、とめた。大丈夫よ、その方は。誰があ、あんな親類！　だけど、N・Y工業の方は少し違った話らしいから、父さんも会いたいんじゃないかしら。

乙骨　俺あ反対だ。そんな話は一切反対だ。……しかし話を聞くだけでも、来たら会えばいいさ。取って食おうとはいうまい。

亜子　私もそれをいつてるんだわ。……四五日前から、階下で一二度見かける人があるの、その人じゃないかとチョット思ったもんだから。……先刻も、来てた。

順一　来てるのか？

亜子　違うかな。例の高利貸の番頭と、暴力団の奴が来てて、それからその人と、三人とも管理室でお孝さんがお相手をしているんだから、やっぱり借金取りか何んかだわね。

乙骨　加賀に会いに来たもんなら、取り次がぬ筈はないよ、いくら鬼婆のシャツ面でも。

順一　……算の方では、自分の債権者を全部此処へ振り向けてよこすのらしいな。

亜子　……お孝さん凄いわよ。通りがかりにガラス越しにチラッと見てギックリしちゃった。長火鉢の前に、こうして、こんな具合に横坐りに坐ってさ。紅いものが裾の間にチラチラしてる。

乙骨　馬鹿！

亜子　ウツフン。何を話しているか聞こえはしないけど、蛇の様な眼で番頭を見ているの。かと思うとジロリと別の一人を見て頬の辺だけで笑うんだけど、何てまあ色っぽい眼付きをするんでしょう……私、こわくなっちゃった。

乙骨　あいつも以前は、あんな女じゃなかった。

亜子 そうね。おとし、あの骨無しの子ちゃんを亡くしちゃってから、メッキリ……。私にはお孝さんの心持少しはわかる。

乙骨 馬鹿をいうな亜子！ バイドク女の心持をお前に解られて、たまるもんか。

亜子 だけど、とにかく偉いと思うわ。私達も少しは見習わなくちゃあ。良いか悪いかは別問題として、どうでしょう、あの向う意気の強さ……。私達にはあんなものない。

乙骨 なくて仕合せだ。……おお仕合せで思い出したが、先刻、謙五が来たよ。

亜子 そう……。何かあった？

乙骨 わからん。不得要領さ。機械の話ばかりクドクドしていたよ。そんな筈はないというんだ。見たいんだな、今度の順介のを。結局自分の使っている奴が可愛いのかな。職人かたぎなんだな。もつとも工場がもともとあんな工場だから職人かたぎにもなる。

順一 それもあるさ。しかしそれだけじゃない。

乙骨 (亜子に) お前が帰るまで待っているといつても、へえとか何とかで、いつの間にか居なくなっていやがる。ありや、いい男だが、もう少し何とかテキパキさせる訳には行かんのかえ、

亜子？

順一 工場じゃ、もう先月から給料払ってないそうだね？

亜子 へーえ！ 謙さんがいつてたの？

順一 経営困難か、ふん……。算がいうそうだ……。加賀先生の新しい機械がいよいよ出来上って他工場へ買収されると、同種の機械でいて能率は約三倍になるから、内の工場は閉鎖という事になる……。かも知れない、ともいつたそうさ。

亜子 従業員全部に？ まあ？ そんな……。

順一 皆不安がつてるそうさ。謙さんなざあ、真青になつてる。……僕がいつてやった、父さんの新機械が他工場へ行かず、算の工場に入ることになつたとしても、そうなれば人手は今迄の三分の一で済む事になるんだから、三分の二は首だろうよ。謙さん、ブルブル顫え出したっけ。

「俺あ、いい。けど……」とか何とかブツブツいつてね……算もそれらしい事を皆に匂わしたらしい。どっちせ、(隅の機械を頤で指して) そいつは、僕達一家にたたるだけじゃなさそうさ。亜子 ……順ちゃん！ あんた、これをそんなに呪うの？ そいで、父さんに済むと思うの？ いいえ、死んだ母さんに済むと思つて？

順一 機械を呪うたあ、どんな事だい？

亜子 ……悪いのは、機械でも父さんでもない。

順一 そうさ。悪いのは機械でも父さんでもない。……算でも、従業員でもない……ともいえる。しかし、或る人間が或る人間を憎むという事は、それとは別の事実だ。

乙骨 そんな話はよせよせ！ なあ！ 今日はこちらから加賀が、機嫌よくお祝いの酒盛りをやらかそうというんだ。皆で、酔っぱらつて、歌でも歌おう！ な！

(ギターを弾く。——どこかの室からヒーツツという女の金切声が響いて来る。馴れていると見えて三人は別に気につけぬ。間)

順一 ……何という綺麗さだろうなあ！ 人間を作つたものが、同時にこれも作つてる。……神、すべてを創りたもうか。

乙骨 全くだ。人間だつてバイキンの一種かもわからんよ。覗いてると時々そんな気がする。第

六次元位の世界ではだなあ……人間がペチャンと板ガラスに張り付けられて、染められて、顕微鏡で覗かれているかもわからんぞ。マリヤよ憐れみたまえ！（誰かの「アヴェエ、マリヤ」を弾く）

亜子 何いってんの、さ、支度をしようかな。……ああ順ちゃん、あそこ今日行って来たわよ。はじめ皿洗いをやらされるんだと。そいでもよければ、住込みで十五円出そうていうの。寝るのは、地下室の、火夫の寝るところで一緒だって。どう……？ 少し、ひど過ぎるとは思ったけど、私、頼むからって、そいって来たの。久我のお君さん、あいだけ心配してくれるんだもの。どう、行く？

順一 お君さんが、世話してくれたのか？

亜子 そうよ。一番上の兄さんが、あの食堂の釜焚きしているの。……ねえ？ 順ちゃん、何でもかまわん、身体で働いて、はじめからやって見たいって、そいってたわね？

順一 ありがとう。……しかし、やつぱり駄目だよ。……僕あ、駄目だ。

亜子 無理に働いて貰おうといっってんじゃない。それはわかって呉れるわね？ 駄目か、駄目でないか、やって見ましようよ、もう一度。私達が……（順一郎がテーブルに突っ伏す。それを見て亜子言葉を切り、弟をジッと見て立っている）……母さんを思い出して頂戴。順ちゃん、母さんを思い出して頂戴。（順一郎は身じろぎもしない。亜子、弟の肩に手をかける。順一郎、呻き声を立てる）あら、どうして？ 気分が悪い？ 順ちゃん！ ねえ、どうしたの？（順一郎の呻き声）

乙骨 放っとけ、放っとけ！ 病気だ。

亜子　ですからさ、又、頸のキズが……。

乙骨　違う、それじゃない！　放つとけ。そういう馬鹿だ！……（歌）それでも、なつかしい、遠くの人。

（ギターを弾く。――階段で足音がして加賀順介が昇って来る。鑄鉄製の重く大きいピストン・ロッドを肩に担ぎ、左手にはビール・ダースを荒なわでしばったのを下げている。輝くばかり元気である。しかし不審そうな表情で階下を覗き覗き昇って来る。昇り切った所で、立停つて更に階下を覗くようにして何かを考えている。しかし直ぐ思い返し、グルリと身を引いて歩き出さうとするが、その拍子に重い荷物の慣性のために、二歩ヨロヨロとよろめく。自分をよろめかしたピストン・ロッドの肌を右手で愛撫しつつ、ニコニコ歩き出した彼の耳にギターの音がはじめてきこえる）

順介　よし、よし、よし！（ギターに合せて歌）近くの谷間にもう一人、居るう！（元気よく室の方へ）

乙骨　ああ帰って来やあがった！

順介　もつと弾けよ夏雄！　さあ、これで機械が動くんだぞ！　どうだ、最もよく出来た機械は、そのままでも最も美しい物「生物」だ、どうだい此の肌！

乙骨　恐ろしく重いなあ！　ハンドルというよりや人殺しの道具だ。これで八十五円かあ！　なるほど、人は殺せらあ。

順介　どうだ、此のカーヴで俺が苦心したんだ！　三カ月間此のカーヴを割出すだけの為に夜も昼もぶっ通しで計算した奴だぞ！　美術品だ！　なあ、此の芸術品が、サインとコサインから割

り出されたんだぞ夏雄！ 降参したか、画描きめ？ アハハハ、拝め！ ええと、さあ、ついでに、これだ。（とビールをテーブルの上に音を立てて置く）お前が本当に拝みたいのは、こつちだろう。アハハ。

乙骨 そんなに費っていいのかい？ もうないんだろ？

順介 心配するな。ないにはないけど、あと、もう小さい部分品が四つばかりで完成する。ハハ。そうなれば。……順、どうだい？ 今度こそ、父さんが……どうかしたのか、順一？（順一郎答えぬ）

乙骨 しかし、出願の方、まだ、まるきり……？

順介 うむ。……ええと、今日私の留守に誰か訪ねては来なかったか？ 粕谷という人だが？

乙骨 来ないよ。一日家にいたけど。……N・Y工業とかかい？ じゃ、ホントに売るのか？

順介 そりや、会って見なきゃ、わからん。全部買ってもいいとはいってる。プリントの方の権利だけを譲るという事で、相当の補助金を出してもいいともいうんだ。……来ないのか。そうか、ま、いい……さあこれをお抜き、飲もう。さあ亜子、御馳走は揃えたね。早く仕度しなさい。何をぼんやりしている？（亜子黙ってビールを取り上げ、抱えて次の室の方へ）ああそうだ。亜子、筧の方はどうだった？

亜子（敷居の所で立上るが、振返りはせず、チョット黙っていた後、向うを向いたまま）駄目でした。……（次の室へ消える）

順介 なに、駄目？ そんな筈は……亜子……（と続いて次の室へ行こうとしかけるが、やめる）……もう一月の余も期限は切れている。そんな筈が……（次の室へ呼びかける）居るには居たん

だろう？（次の室では皿の音）そうか。此方の事情はよく話したんだらうね？（フォークを取出す音）ふうん。じゃ何故、もつと辛抱強く坐り込んで談じ込んでやらないのだい？（亜子、肉類の載った大きな西洋皿を右手に、左手にはフォークとパンを持って出て来て、黙ってテーブルの上に並べる）

順介　それで、何だっというんだい？（亜子答えず、再び次の室へ消える）どうして返事をしない？　どうかしたのか？（その間、テーブル上のケント紙や筆や顕微鏡を黙って片附ける乙骨。順一郎は、ギターのリ弦をまさぐって微かな音を立てている。亜子再び、ビールとコップを三つ、セン抜きを持って出て来てテーブルの上に置く）え？　しかし、いくらかは渡して呉れたらう？  
亜子　……一文も呉れはしません。

順介　一文も？　何故、じゃ、談じ込んでやらないんだ？

亜子　三時間足らずも頼んでみました。

順介　……頼む？　頼む必要はない。此方はキチンと受取るべきものを請求しているのだ。もうとうに期限を過ぎている残金じゃないか。頼むなんてそんな……！

亜子　一残の金だって自分の所では遊んではいけない。第一、工場の方を譲受けた金だって、工場全部を抵当にして他から融通して来た金です。それが五カ年で肩を抜くつもりが、その後工場の販売の方がうまく行かず、肩が抜けるどころか利息も満足には払えはしない。期限が来てるんで下手をすると、一切合切差し押えられる……。

順介　そ、そんな！　販売の方がうまく行かないって、今になってそんな！　私がやり、算が営業の方をしていた当時はあれだけ利益を上げていた工場じゃないか！　じゃ、あんなに拝む様に

いって買取らなきやいいんだ！ 今になって難くせを付けようたって、そんな、無茶な……。  
亜子 とにかく先方ではそういいいます。……その話かどうか、とにかく、金貸しと銀行の人が詰  
めかけて来ていたようです。

乙骨 ふうーん。上には上があるもんだなあ。

順介 しかし、その事と、これとは話が別だ。私のいつているのは此のアパートの譲り渡し残金  
だよ。それをハッキリ何故いつてやらん？

亜子 いったんです。しかし……半金だけは払い済みだから、そう急がれても……。

順介 よし、そいじゃ、やめだ！

乙骨 しかし、加賀、君はハンコをついたぜ。

順介 そうさ。六月十五日までには代金を完済するという約束だ。その約束が……。

亜子 それもいいました。そしたら、そんな堅い話になって来るんですたら、仕方ありません。  
譲受名義人はお孝なんだから、そっちへ話してくれ。

乙骨 畜生！

亜子 立派な公正証書だつていいいます。お孝さんの物になすという書類に、父さん、チャンと印  
を捺したんですもの。……これこれで、原寸大製作と出願費用に要るからと、泣くようにして頼  
みました。したら、なるべく早く拵えてお渡しする、誠意を以て……（泣き出す）

乙骨 誠意を以て！ ……うん、その（亜子の泣いているのを見て、まだ何かいおうとする順介  
をさえぎる）よし、もういいよ、加賀！ もういい、そう急に片附く事じゃない、君が自身で十  
何度足を運んでも埒の開かなかつた事だ。女の子が行つて、そう右から左に、なるもんじゃない。



もう、いいやな！ 又明日さ、もういい！

順介 ……なるほど、お孝か。そうか。そうさな、よしよし、私が明日又行って来る。あれだけ面倒を見てやってあるんだ、先だって、まさかとなれば一片の誠意は持つてる男だ。ねえ、そうだろう？ その話は、止そう、よしと！（ビールを抜く）さあ、乙骨、あげた。あげろよ。

（注ぐ）そう心配したもんじゃない！ なあ！ 万事うまく行くとも！ さあ順一、お前もおやり。

順一 僕あ、飲まん。

順介 そういうな。お祝いだ。さあ！

順一 いらん。

順介 なぜ、そうお前は逆らうんだ？ 父さんが、これだけ、これだけ皆の為に苦勞して、やってるのが、わからんか！ そしてヤツト……

亜子 父さん、順ちゃんまだ、キズが化膿でもすると、なんだから、代りに私がいただきます。私が……。

乙骨 へー、亜子がねえ？

順介 えらい、よし。アハハハハ。チョッピリだ、ね？ そら、さあ、な！ その調子だ、その調子だ。ハハハ。（ふざけて立上って、グルリとお辞儀をして）加賀式金属プリンティング・マシンの完成のために！ 人類の名に於て！（グイグイ飲む）

乙骨 （これも立上って）よし、人類と来たら、負けはしないぞ！ 人類よ、加賀式を完成せしめたる真の内助者、加賀ミドリ健康の、じゃないや、靈魂のために！ プロージット！

(飲む)

順介 アハハハハ。そりや、よい！ 本当だ、ミドリが拵えたようなものだ！ さ、亜子、プロ  
ージットと行ってごらん。

亜子 (泣きながら笑っている) プロージット、……プロ…… (声を上げながら笑う。ビールを  
少し飲んでむせる。少しヒステリックである)

順介 ありがとう亜子！ お前は、よい子だ。(亜子の手を取って、その手の平で自分の髭の生  
えた頬を撫でる) お前は、よい子だ。な、早く謙五と結婚しろ！ かくさなくともよい、謙五は  
立派な男だよ。

亜子 …… (父にされるままになっていたが突然に顔色を変えて) いやです！ いやです！ い  
やです！ いやっ！ (ケイレン的な動作で、手を振りもぎって、走って次の室へ消える)

乙骨 亜子は何だか妙だぞ。

順介 酔ったのだ。馴れないからな。アハハ。(飲む)

乙骨 飲ませるから、いかん。

順介 実は、自分の分が減るのを心配しているんだろう？ (飲む)

乙骨 それも、ある。アハハ、今夜のは、うまい！ (飲む) 亜子！ 亜子！ 出て来い！

順介 出ておいで！ もう変な事はいわん。順、さあお食べ！ 先刻は怒ったりして、父さん悪  
かった。お前達を随分苦しめた。父さんはいけない父だ。しかし、ホントは、いつも父さんは、  
みんなを仕合せにしてやろうと思って仕事にかかるんだよ。それが、あんな事になるんだ。事、  
志と違う！ ああ！ 事、志と違ったのだ。父さんが馬鹿だからだ。わかってくれるなあ？ 今

迄の事は、許しておくれ。な、許しておくれ、今度は万事よくなるよ。これからはすっかり……。

乙骨 酔ったな順介！

順介 許しておくれ、みどり！ 俺を許して、憐れんでおくれ！ ミドリ！ ……さあ順、お食べ、うまいよ。

順一 ええ。……算は、こんだのを自分の方へ欲しがっているんじゃないやありませんか？ 他へ渡ると工場はつぶれるといって皆をおどかしているそうですよ。……しかし、他へ渡らずに算の工場へ入ったにしたところで、従業員の大半は首になる。

順介 え？ ……そりやお前、そんな馬鹿な事があるもんか！ よしんば……いや、結局、能率の良い機械が出れば、ためになる！ なるとも！ そうだろ、夏雄？

乙骨 そうだ、そうだ、そうだ。（歌） オー、アルテ、ブルシエン、エルリヒカイト、ヴオーヒン、ビスト、ドウ、フェルシュヴンデン。

（歌の間に、順一郎は椅子を立ててユックリその辺を歩く。階段をお孝が真青な顔をして昇って来る）

孝 （低く） へっ、虫め！ なによういつてやがる。（階下から続いた気持で） チェツ！

順介 （乙骨と声を合して） Nie kehrt wieder die goldene Zeit, so froh und ungebunden !  
孝 （室に顔を突込んで） 順一さん、御面会。

順介 面会？ ……僕に？ 何んという人です？

孝 警察じゃありませんよ。若い女の人です。名前は訊ねてもいわない。会えばわかるからって、

ホホ、ベツピンだけど、惜しい事に少うし青くて、むくんでる。玄関でお待ちかねよ。（順一郎、そうですかともいわずにスタスタ出て行き階段を下へ消える）ハハ。おやまあ、いい御機嫌ねえ。順介 何だ？

孝 （小指を出して）これですき、一目見りや様子で知れる。（ジロジロ室内を見ながら入って来る）

順介 そいつは！ どれ。（出て行きそうにする）

孝 （その腕を掴んで引止めながら）放って起きなさいよ。順一さんにしたって、いい若いもんだもの。女の子の一人や二人、へへへ、ねえ、乙骨先生。

乙骨 うう、うん。

孝 チョイとこう、年の割にやドスの利いた眼付きをしてる娘よ。いいねえ、好いて好かれて

（いつの間にか椅子に腰かけている）

順介 （乙骨と顔を見合っている）……もしかすると、一緒につかまったという、その……？

乙骨 まあ、いいよ。大丈夫だ。

孝 そうですき。あいだけの思い込んだ眼付きなら、下手せいたりすると、心中もんだ。棹させばーあ（実はしんは非常に酔っているのである）チツツン、シャン、三味線がほしいねえ。

順介 まあ一杯、行こう。（ビールを注ぐ）

孝 へえ、ありがとう。（飲む）あああ！（襟をグイとしごいてはだける。すその辺もチラホラしてだらしなく、膝の辺まで白い足が覗く。階下で散々酒を飲んでいても、借金取りや暴力団その他、大の男を向うに廻わしてわたり合っていたために発しなかった酔が今になって急に出て

来たらしい)

乙骨　こりや、酔うとる！

孝　悪いの？　フッフ酒飲んで酔わない奴あ、ドロボーだ。ドロボー！　やい！　（乙骨があわてて片付けようとするギターを引っさらう）アハハハ。ちよい拝借。舟は想いを岸につく……

（歌って、ギターを三味線流に引掻きまわす）まあ、何てダラシのない音じめだい、此奴あ！  
トコトト、田の中に、タニシが、びっくりして——（踊り出す。ギターを掻きまわしながら、太腿の辺までむき出して、テーブルの周囲を踊り廻る。ビックリして次の室から出て来る亜子）  
アハハハハ。ハハハ。

乙骨　あぶない！　こら、あぶないよ！　（実はギターをこわされないかと心配しているのである）

孝　にくらしい程、可愛ゆうて……（丁度亜子の前に踊って来てる）ねえ、亜子さん、そうでしょう？　好いてりや、仕方がないじゃないの？

順介　亜子、お前も此処に坐ってお食べ。

亜子　ええ、（笑い乍ら坐る）

乙骨　うまいぞ、今日のベーコンは。（亜子）

孝　（くたびれて椅子にかける。乙骨手早くギターをさらって室の隅へ行く）にくらしい程、

……にくらしい程……（いつている間にテーブルにグツタリ顔を伏せる。肩や背が、波打ちはじめめる。シャックリとも泣き声ともつかず、キュツキュツという声を出す。今度顔を上げたのを見ると、泣いている）私を助けて下さい！　先生、私を助けて下さい！　助けたまい！

乙骨　こんだ、泣上戸になりやがった！

孝　算に、私は惣れています！　ええ、心から、底から、私あ、算が好きなんですよ！　だから、だから私は、算の為なら、何でもして来ました！　ええ、どんな、どんな事でもやります！　何が糞ッ！　千三つ屋の、ギャングのなりあがり者さね！　大きなお世話じゃねえか！　ええ、そりや算は悪徒ですとも！　そうしなきや、なりあがれねえんだ。立派な悪徒です。算の手足になって、やって来たこの私も悪党だ！　それがどうだっというんだい。算をさ、その算を散々に使っというて、いざとなると、手の平を反すように、こんだ手をねじり上げる奴がいるんだ。畜生！　カブト町、藤川の、クソ株屋の高利貸しめ！　かと思うとその藤川が安田の方から石油株で寝返りを打たれてヒーヒー悲鳴をあげてるんだ！　悪徒の本家本元は、じゃ、どこだい？　上から上と、どこ迄たぐって行きやあ。……世間の奴あ、みんな口を拭って、私あ知らんよといったツラしやがって、行儀のよいふりをしていやがる、算が、私あ、可哀そうでならないんですよっ！　ワーツ、ワーン！（殆んど自分で何を喋っているかわからず）ええ惚れてますとも！　だから、だから、いっそ私や憎いんだ。本宅におかみさんをチャンと置いといてさ、それにこうして私というものがいるのに、赤坂くんだりの小便芸者なんぞを又、引っかけたりしやがって、そいで、私の立つ瀬が、どこにあるんだ！　子供はどうなるんだっ！　子供はどうなるんだっ！　私あ、憎いんだっ！　先生、私あどうなるんです！　ワーツ。憎い、悪徒め！　あんたも用心なさいよ、先生！　算の奴あ、たくらんでいますよ。あの鬼が、その事で、どんだけの悪たくみを仕組んでいるか、あんた等知らないんだ。あんたあ神様だ。ねえ、私を助けて下さいよう。アーツ、アーツ、そいでさ、此処の地代の取立てや自分の借金取り、政党のゴロン棒まで、金を取りに此方

に振り向けて来やがって此の私に、身持の私に、さんざ手を使わせてさ、私あ算が憎い！ いいえ、惚れているんです！ ねえ、先生、新しい機械は算に渡して下さいよ。ねえ！ 惚れていますとも！ それ何が悪いんだ？ え？（少し静まって三人を見廻す。お孝のクダを巻く気特に迫られて、先程からジツト西洋皿を見詰めている亜子の上に一番長く眼を留める）……私だつて元はといえば、一本になる際に、六十爺に水揚げして貰うんで、それが、いやさに神田川に身投げをした様な、気の弱いオボコだったんだ。とびこんだら、畜生、水が浅くって背が立っちゃつたあ。そいつが、私にケチの付き始めた。金だ、金だ、金が、私のカタキでい、ワーツ、ワーツ、助けて下さい。よう、先生私を助けて下さい。画描きさん、あなたも、私を助けてよ。ああ、ああ！（しゃくり上げて泣く。それを立って見守っている順介と乙骨。——間。お孝次第に静まり、亜子を見詰める。次第に意地の悪い、嫉妬に似た光がその眼の中に差して来る。——しゃくり上げながらである）

亜子 ……ああ！（急に前に屈み込んで、嘔吐するようなしぐさ。二度三度四度同じ事をする）  
ああ！

順介 どうした、亜子？ どうした？

乙骨 気分が悪いのかい？ え？（近づいて背を撫でにかかると）

亜子 ……いいえ、いいんです。青い皿、見ていたら、急に……（といている間にも胸を圧え、一、二度嘔吐）……いいんです。（その様子をジツと睨むようにして見詰めているお孝。——亜子立ってフラフラしつ次つ次の室へ）  
順介 疲れたんだ。少しお休み。

(消えて行く亜子の後姿を見詰めている間に、お孝の頬に変に惨忍なニヤニヤ笑いが浮んで来る)

乙骨 此の皿の色がいけないんだよ。

孝 ……ふん。ふーん。へっ。……そうか。

順介 なんだい？

孝 あれ、何だと思うの、先生？ へっ。そりやそうだろうさ。いま時、廿を越した女が、ねえ。

ハハハハ！

乙骨 お孝さん、何を変な事を……。

孝 そうでしょうよ！ くそ面白くもありやしない！ アツハハハハ。ハハハ！ あれはね、知らなきやいってあげようか？ あれは、ツワリですよ！ 何がお嬢さんだい！ ハハハハ！ アツハハハハハハ。(とめどなく哄笑する。茫然として立っている順介と乙骨)

(階段を昇って戻って来る順一郎)

順一 父さん、下に訪ねて来ている人があります。粕谷さんとかいつてました。

順介 粕谷？ よし、今行くよ(とは返事しても、次の室の亜子の方へスツカリ気を取られてい  
る)

孝 なんだって、粕谷?! 畜生、又来やがったのか！ ようし、どうするか！(いいさま、豹の様に、飛び上るなり、椅子を突き倒し、なりもふりも構わず廊下へ走り出して行き、ドドドと階段を走り降りて行く)

順介 粕谷か。うん……(我に返って) なんだって!! 粕谷さんが来たのかで？ 下か？ そう



か！（外へ）

乙骨 売る話は急いじやいかん！ 加賀、とにかく金を受取っちゃ駄目だぞ！ 俺あ反対だ。

（よくも聞かないで順介階段を下へ消える。乙骨はその後を追って行きそうにするが思  
い返して、只心配そうに見送る）

（間）

乙骨 誰だったい？

順一 粕谷というんだろ。

乙骨 それじゃない。お前を訪ねて来たという女の人さ。

順一 うん。……もと一緒に仕事してた女だ。

乙骨 又出て来いというのか？ 何んといってやった？

順一 何にもいわん。……いえやしない。俺には何もいう資格はない。あの女にも……そいから  
謙五君にも。

乙骨 亜子は……（次の室の方を見る）

順一 姉さん。姉さん！（その方へ行こうとする。ボンヤリ青い顔をして出て来る亜子）どうし  
たんだ、姉さん？

亜子 ……（二人から見詰められたまま、しばらく立っていた末、黙って、しゃがんで、それか  
ら壁に両手を突いてしまう）……私は、私は、……弱い……母さん、私は……。

（亜子を見下して立っている順一郎と乙骨。暗くなつて来る。風の音。階下で何か怒鳴  
るお孝の声が二声ばかり。どこかの室で起るレコードの響き——暗転。レコードの音楽

は真暗の間もズット続き、第三場の始まる直前まできこえている)

3

同じ室。同じ日の夜。まだ電燈がつかない。暗転の間をつないでいた音楽が終り、シーンとなる。少し永過ぎる間。

不意に、暗い中で、ドタンボタン、ガラガラ、ドサツと音がしはじめる。二人の人間が暗い中で組打ちをしているのである。呻声。重い物でテーブルの上を叩いた音がバリバリツと響く。——暫くそれは続く。足音が階段をあがって来る。——乙骨。

乙骨の声 (階下へ向って) 早く、つけてくれよ! こう暗くつちや何もやれやしないもの。いくらメートルが上り過ぎるたって君そんな! 室代は二三日中に払うからさ。払いますよ、頼むよ。頼むよお孝さん! (一人ごと) 馬鹿にしゃがって、バケモノめ! 限度があるぞ、畜生!

(物音に不意にびっくりして) 何だ!! どうしたんだ!! (加賀の室に走り込んで来る) 誰だ!!  
おい、おい、おいどうしたんだ? 誰だ? こらっ! おいっ! 誰だといっているのに! おお!  
(引き分けにかかる) 何をするんだっ! 加賀! 順坊! 順! よせ! なんて、そんな!  
おい、こらっ! よせといったら、よせ! (やっど引き分ける) どうしたんだよう!  
喧嘩なぞ、親子で、何がどうしたっていうんだ? え? (順介も順一郎も疲れ、息を切らしていて返事をせぬ) ……どうして喧嘩なぞするんだ?

順介 …… (ゼイゼイ息を切らしながら) な、な、夏雄……。

乙骨 どうしたんだよっ？ 順坊、どうしたんだ？

(順一郎は返事をせぬ)

順介 ……助けてくれ、夏雄！ 順が俺を鉄で……。

乙骨 なんだったって？

順介 俺が、帰って来て、ヒョイと見ると……ハンドルを振上げて、順が機械を……。

乙骨 気でも狂ったのか、順坊!!

順介 ……俺、とめようとした。たら、こんだ俺になぐりかかって来る。そいで……。(ポカッと電燈がともり、明るくなる。順介は疲れ切って肩で息をしながら、隅の機械をかぼう様にして、床に膝を突いている。順一郎は、前場で父の持帰った鑄鉄ロッドを杖に突いて、テーブルの側に石になった様に立ち、左手をテーブルに突いて息を切らしながら、父を睨みつけている。乙骨は二人の中間に立って、雙方を代る代る見る。……そのままで永い間) ……此の子は、俺を殺す気だ。(……順一郎がロッドをドタンと床に置く)

乙骨 どうしたんだ、順坊？ どうしたんだよ？

順一 ……。

順介 ああ、腰を打った。痛い。

乙骨 どれ、立てるか？

順一 ……(割に落着いた声で) あなたが、最初、金属印刷を完成して、それを使って工場をやるために、工業学校の講師をやめる時に、母さんは、あんなに強く反対した。その時から母さんはチャンと知っていたんだ。私、今に父さんに取り殺されてしまうよ——母さんがその頃、笑い

ながらいった事を僕はハッキリ憶えている。母さんは、覚悟なすっていたんだ。（次第に急速に一気に喋る）工場は建った。はじめは、うまく行ってた。しかし、あなたに、経営して行ける訳はない。段々欠損がふえる。仕方なく、中途から営業主任に入っていた筈に株を売る。その金で、此のアパートを建てる。一家の生活費と、あなたの研究費を出すためだ。ユーレカ、ユーレカ、ユーレカ！ ……それを考えて、なすったのは母さんです。母さん、疲れ果て、血を吐いて痩せ細った。二年経って、母さん、死んだ。だら、今度はもうアパートの経営もうまく行かん。いつの間にか二重も低当に入ってる。いよいよ清算という事になって又候算が乗り出して来て、どさくさ清算したトタンに二足三文で譲った。その金を、その金を、又ドブへ捨てる。 ……僕あ、いい。姉さんはどうなるんだ？ 内じゃもう一月も前から、食べる米がない！ それを姉さんが一人で苦勞して、皆にかくして、着物を質に入れちゃ、一升買いをしている。近頃姉さんが、母さんのお古るのあの、ジャンパーばかり着てるのを何だと思ってるんだ？ 着物がみんななくなつて、あれだけしきやないんだ。 ……僕あ知ってる。 ……姉さんは、妊娠しているんだぞ。赤ん坊が生れるんだ。 ……あなたは、僕達の生活をメチャメチャにってしまったんだ。もう沢山だ。なのに、又候、ペテンにかけられる。しかも、N・Yの方からもやって来て、少し甘い事をいわれると金を受取る。その金を又、弁理士や工場の未払い株へ入れる。堂々めぐりだ。自分で自分の頸に二重三重の鎖を作っていて、それを知らん。いい気になっている。それがあなただ。

……こんな、こんな事になるのは、ホントは、悪いのは、世間だ、カラクリだ。理窟は、そうだ。知ってる。理窟。それが何になる？ それが何になるんだ？ 俺あ、憎い！ 俺あ父さんが憎い！ 俺あ、憎む！

(一気にパツと喋つて来て、此処でプツリと言葉を切る。シンとなる。二階のどこかの室で、三四人の止宿人が一室に集つて談笑しているのか、その笑声が風の音に混つて響いて来る) ……。

(永い間)

(順一郎の頸の繻帯に、血がにじみ出してくる)

乙骨…… (それを認めて) ああ、いかん! だから、いわん事じゃない!

順介 あつ! あつ! 疵が破れたのだ! こりやいかん! 順、まあいいから、よく解つたから、な、な! 手当てをさせておくれ。な! 父さんが悪い。悪いのは私だから、又後で話はユツクリ聞くからな。父さんを可哀そうだと思つてくれ。な! とにかく、手当てをしないと…… (順一郎の繻帯をほどきにかかる。熱を計るためにその額に手の平を当てる) 乙骨。すまんが、水を。早く!

乙骨 よし、よし。……しかし今繻帯をとくのは却つて、悪くはないか。しばらく寝て……。

(突立つたまま、父が、手当てしてくれるのを、別に拒みもしないで黙つていた順一郎が不意にワーツと声を挙げて泣く)

乙骨 ……とにかく、此処へ坐れ、順坊。静かにしていなきや、いかん。

順介 苦しいのか、順? え、苦しいのか!

(順一郎、椅子にかけて、黙る)

乙骨 なあに大した事じゃない。チョイと破けただけだから、静かにしていれば、ひとりで止るよ。

順介 父さんがいけない、なあ順！ 私を可哀そうだと思っておくれ。何度もいう様に、皆に悪かれと思つてやっている事ではないのだ。それが、しくじるから、皆を苦しめる。しかし今度こそは、どんな事があつても必ずうまく行く。行かせずに置かぬ。見ている！ どうせもともと、私が自分の力で作ったものを、私が扱うのだ。ほかから指は差させない。

乙骨 N・Y工業から金を受取つたというのは本当か、加賀？

順介 ウム。しかし極く僅かだよ。それも権利を売るとか何とかの話ではない。N・Yの方に場合に依つて物理工程の一部分だけの製作権を譲つて貰うといった、まあ好意的な申し出なんだ。

順一 ……証書を書いたんですか？

順介 書いた。書かない訳には行かん。しかしただ金の受領書だけだよ。

乙骨 まずいなあ！

順介 大丈夫だよ。まさかとなれば、金を叩き返せばいいんだ。

乙骨 返すといえ、算の方に、叩き返してやれないのか、その金を？ 此のアパートの譲渡契約を破棄してしまうのだよ。そうすりゃ、残額を今日払う明日払うで散々つばら引伸ばされて待つてくたびれる必要はなくなる。

順介 ……ない。

乙骨 え？ ない？

順介 製作所に払つて来てしまった。……有つても、それは駄目だ。第一、算の方で契約破棄をウンとはいやしない。破約金を出せ、だ。よしんば、承知したとしても、此のアパートはもう算の手で債務付き低当になつているよ。そいつまで、じゃ、かぶつてくれる、と来るに決つている。

乙骨 ……うーん。 ……するとうと？

順介 算との話にはならんで、結局は奴の債権者との交渉になるかな。 ……しかし、先き先きはとにかく、此方は残金の支払いを催促する迄だ。

乙骨 だって、払いはしないじゃないか！

順介 ……順、父さんをとがめないでくれ。 ……俺が悪い。 ……（乙骨に）なあに、何とかなるよ。どっちにしろ、誰が何といったって、此の機械は俺のものだ。

（広津謙五が、あわてて階段を駆け上って来る）

謙五 加賀先生！ 加賀先生！ ああ此処か。

乙骨 何だい、アワを食って、謙五？

謙五 工場の方へ急いで来て下さい。亜子さんが呼んで来てくれて。

順介 亜子か？ 工場にか？ だって亜子は、もう一度算に話をして来るって出て行ったのだよ。

謙五 オヤジが丁度工場に来ていたんで、追っかけて来たらしいんですよ。とにかく……なんだ。直ぐお父さんに来てくれて。

乙骨 工場で算と談判しているのか？

謙五 違う、違う。オヤジは先にどっかへ出かけちゃったんだ。

乙骨 じゃ尚更だ。何の用で加賀を……

謙五 じれってえなあ。工場でゴタゴタが起きてるんだ。そいで……。

乙骨 ゴタゴタ？ 誰が？ こんな遅くにまさか職工連中？

謙五 二三日前から、ミノワのチューブで夜業をやってますよ。

順介 未払いの給料の事でか、謙五？

謙五 それもあるけど……え、まあ、そんなことでね、先生行って下さらなきや、どうにも納まらん。オヤジは喋るとフイと、どっかへ行っちゃまうし、ぶちこわしても始まると……。

順介 そうか！ それはいかん、よし！（出て行きかけて、入口で振返り）夏雄、順とそいから……（機械の方を指して）頼むよ。なに、直ぐ帰える。

（小走りに階段を降りて消える）

乙骨 謙五、お前も行くんじゃないのか？

謙五 へえ……。

乙骨 早く行けよ。え？

謙五 ……（椅子に掛けてしまう）それがねえ。

乙骨 なんだ又、ボヤボヤするか。

（間）

謙五……弱った。

乙骨 弱ったたあ何だ！ お前が弱る事はない！

謙五 いいや、俺、間に挟まって困ってんだ。加賀先生、新しい機械をN・Yか昭和捺染の方へ売ろうとしているのは、ホントですか？

乙骨 誰が、それをいった？

謙五 オヤジが、八時頃、仕上部へ入って来るなり、いきなりいうんだ。そうなれば此の工場は閉鎖だ。お気の毒だけど……。



乙骨 筧が、それをいうのか？

謙五 工場の方に使わしてくれと、いくら加賀さんに頼んでも、いやだという返事だ。……そう  
いった、オヤジが。そうなると、今迄二カ月もの未払いの件で、オヤジの事怪しからんと憤慨し  
ていた皆が、こんだ、給料の段じゃなくなっちゃって、スツカリわき返っちゃった。錫の釜をひ  
っくり返す奴がいる。女工の方なんぞ、泣いている奴がいたりしてね。そこへ、亜子さんがやっ  
て来たんでさあ、いけねえや。

乙骨 じゃ何か、亜子に乱暴を……？

謙五 冗談いっちゃいけませんよ。皆あ、託児所で亜子さんを、好いてるんだ。手だしなんぞ！  
それに、僕がいる。仮りにも、そんな真似はさせない。……が、なんしろ、弱った。

乙骨 お前が弱る事はない。

謙五 しかし皆は、そう思い込んでいるんだから。……それで、僕と亜子さんの事、先からみん  
なもう知ってるんだ。僕が何かいうと、貴様は、だから、先生一家の味方するんだ。黙って引っ  
こんでろ。……こうだ。間に挟まって、僕あ……。僕あほかの事あ何でもいいけど仲間からだけ  
は、疑われたくない！ そいだけは、我慢ならないんだ。身を切られるように辛い！

乙骨 馬鹿野郎！

謙五 僕あ職工だ。労働者だ。

乙骨 違うといったら！ 責様達あ、筧に引っかけられているんだ！

謙五 そいから……あと半月もすれば、仕上げの連中はみんな揃って印刷の支部に加入する事にな  
っているんだ。俺あそれに仲間はずれにされたくない！ 俺あ、労働者だ！

順一 ホントかい、謙五君？

謙五 ホントにも何にも、僕なんぞもそいつの世話役の一人だもの。

順一 じゃ、問題ないじゃないかな。むしろ今度の事は、うまく利用すれば……。

謙五 利用するって？

順一 相手に取って戦うべきものを見あやまりさえしなければ……うん、いやいや。

謙五 なぜっ？ 順一さん、どうしていつてくれないんだ？

順一 駄目なんだ。僕あ何かというと、いや何をいつても、みんなウソになるんだ。ウソだ。

謙五 弱ったなあ。僕あ亜子さんにも、託児所の事で……

乙骨 馬鹿、馬鹿、馬鹿！ これだけいつても、お前達は笥のペテンにかかっているということが、わからんのか！ 加賀が、なんで、なんでそんな訳のわからん事を（どもる）お前達に難儀をかける様な事を、なんで、加賀が……ええい、馬鹿野郎っ！

謙五 これだけいつてもいつたつて、何も……。

（いわせも果てず、乙骨が飛びかかって来て、殴る）

乙骨 間抜けっ？ この馬鹿！ 野郎っ！（反抗しようとしないう謙五の顔をなぐり飛ばし、こぶき廻し、床の上に引き据える）間抜け！

謙五 先生！ あ、痛え！ 乱暴しちやいけねえ。乙骨さん、だつてさ……。

乙骨 だつて！ クソツ！ 貴様のいう事あ、いつも、それだ！ そういう奴だ、貴様あ！ くらっ！ 亜子はな、知ってるか、貴様あ——亜子は貴様の……。

謙五 （乙骨が手を放したので、ホーホーの態で立上つて）驚ろいたなあ。ひどいや、先生。

……亜子さんの事あ、チャンと僕話そうと思つて……工場の事話しているかと思うと出し抜けだもの。おお痛え。

順一 ……謙五君、君あ、姉とのこと……？

謙五 ええ、そりや、そんな氣でいるんだ。おふくろも、妹も、そいった風に……そいで、ひどく悦こんでいるんだ、うち中みんな亜子さん好いてるんだ、しかし、今の様になりや、工場も、みんなも、とにかく、僕だつて、メチャクチャになっちまうんだから……いずれ……。

順一 姉さん、妊娠しているよ。

謙五 へっ？（石になった様に立ちつくしている）

乙骨 間抜け！ 馬鹿野郎。

謙五 ……（椅子に掛けて、頭をかかえる）……弱つたなあ！

乙骨 亜子の、それを、弱つたと!! き、き、貴様！

謙五 ……それじゃない。それは、いいんだ。いいんだというと何だけど、とにかくその事あ、俺亜子さんについちゃ、永い間、命にかけて考えてんだから、今更それは問題じゃない……ねえ、何とかして加賀先生に頼んで、機械をホカへ渡さないように出来ませんか？ ねえ？ 全く、俺あ間に挟まって弱るんだ。どうにも苦しくつて……。弱つたなあ。（男泣きに泣いている）

（順一郎黙つて立上つて）

順一 チョット、工場の方へ行つてくらあ。

乙骨 な、な、何を、その身体で！

順一 ううん、いいんだよ。

乙骨 馬鹿をいう！ 今、動くと思ひ死んでしまふぞ。死んでしまふぞ……（口ごもる。しかし身体はグイグイと順一郎を廊下へ押しやりながら）とにかく、動いちゃ駄目だ！ 俺の室にいる！ 寝ている！ 小父さんのいう事、聞かんと、もう知らんぞ！ まあいいて！（自分の室へ順一郎を押し入れて寝かそうとして、しきりとなだめる。戸を閉める）

（一人残された謙五は泣き止んで、下を向いて考えている。……しばらくして二人の去った方をボンヤリ気にして見る。室内を見廻す。隅の機械が目に入る。苦しげな表情のまままでそれを見ている）

（順介と亜子が階段を昇って戻って来る。打ちくだかれた様になり、頭髪は乱れシャツも破れ、歩く足も乱れて順介が、室に入って来る。亜子は、疲れ果て、真青な顔に頭髪は乱れ、階段の上りばなの所に坐ってしまい、グッタリする）

謙五 先生……。

順介 ……（椅子に腰を下す）……ウーン。（低く唸る）

（間）

謙五 どうしました？

順介 ……ああ、まだ此処に居たのか、謙五？

謙五 おさまったんですか？

順介 うん、まあ……。

謙五 亜子さんは？

順介 亜子？ うん……（四辺を見廻す）一緒に戻って来たんだが……亜子！

（ヒョロヒョロ

立って廊下へ） そんな所に、お前……。 （亜子を助け起して室に入って来る。亜子は、そこに立っている謙五の顔をボンヤリ暫く見詰めている。順介は再び椅子へ）

謙五 亜子……。

（亜子くずれるように謙五にすがり付き、その肩に顔を押し当てて、声を立てないで泣き出す——）

（間……風の音もしなければ、その他の物音も聞えない）

順介 ……謙五、これから、全体どうしたらいいんだ？ ……お前は仕上部の職長だ。（謙五はソツと亜子を抱いて椅子にかけさせる） 子飼の立派な職工だ。 ……俺には、あの工場の職工は、みんな可愛い。みんな初めから俺と一緒に苦勞をして来てくれた、俺の友達だ。 ……俺あ、皆に、すまん。どうしたらいい？ お前には、わかる筈だ。どうか、それを、教えてくれ。 ……教えてくれ。

謙五 ……（突立ったまま、頭を押えて聞いていたが口の中で「先生」と訳のわからぬ事をいつていたかと思うと、急にベタリと床に坐り、手を突く） 先生！ 済みません！ 済みません！

（三四度、額を床にすりつける。居たたまらなくなり、不意に立上って駆けるようにして室を出て行き、階段をを降りて消える）

（自分の室のドアを開けて出て来る乙骨）

乙骨 （階段の足音を聞きとがめて） 誰だ？ ……（階下を覗きながら廊下を歩み、加賀の室へ）  
おお、戻っていたのか。どうした？

順介 ……俺あ、頭が、グラグラして、訳がわからなくなつて。どうしたらいいだろう？ 夏雄

どうしたらいいか？

乙骨 職工達が騒いでいると？

順介 頼んで、やっと帰って貰った。しかし、一寸延しにしたただけだ。あの分では、騒ぎは大きくなる。無理もないのだ。閉鎖する。筧がハッキリいったそうさ。……みんな可哀そうさ。

乙骨 筧だ。あん畜生だ！

順介 しかし、聞いてて見ると、筧の方も苦しいんだ。あれの親方のブローカーが、株でガラを食って、あげく首をくくったとか、何でもそんな事だ。未払い株や、債務が大分筧の方にかぶつて来たらしい。住居の方に執達吏が来たりしているのだから、満更の嘘でもない。……彼奴だつて根から悪い男ではない、殊に俺に対して、あれだけ面倒見てやった俺に向つて、まさか、それほどアクドイ事はしない。

乙骨 それだ！ こうなつてまでも……君あ、そういつた奴だ！ アクドイもヘツタクレもあるか！ いいや、そうだよ！ そうだったら！

(間)

順介 ……順は、夏雄？

乙骨 俺の部屋で寝させてある。

順介 キズは？

乙骨 大丈夫だ。……亜子、お前も、いつとき横になりな。

亜子 ……(テーブルに突伏したまま立とうとはせぬ。それを見守っている順介と乙骨——間)

順介 ……あーあ！ 俺の頭は駄目になった。……俺も年を取った。もう元気はない。ああミド

リ、ミドリ、ミドリ

乙骨 阿呆をいうのか、順介、これ位の事が何だっ！ ミドリさんは、ああして死にさえもしているんだぞ！

順介 今更の様にあれの偉かった事がわかるよ。あんな弱い身体から、あんなに強い力がどうして出て来たのか？

乙骨 お前を愛していたからだよ。お前や亜子や順坊を愛していたからだ。

順介 愛？ ……俺は、じゃ、人を愛していないのか？ 世間というものを俺が愛していないだろうか？ 俺が仕事に取りかかるのは、いつでも世間の為になるようにという心持ちがなければ思い立ちはしなかった。現に今度のだって……。

乙骨 馬鹿が愛を持つと、相手をも苦しめる事になるよ。そして君あ、馬鹿だ。……俺も、まあ、馬鹿だ。

順介 ミドリ……夏雄、俺達あ、ミドリを死なしてホントに取り返しが付かない宝物を取り上げられてしまったんだなあ！

(間)

乙骨 馬鹿だって、しかし、馬鹿なりに、やれらあ！

順介 ……箕の方に譲ってしまうのか？

乙骨 ねぼけるな！

順介 N・Yの方に売るのが？

乙骨 出来ない相談だ。職工の事をどうする？

順介 昭和捺染へ買って貰うのか？

乙骨 同じ事じゃないか。

順介 許可の下りるのを待っているのか？ 費用もなければ待つ間のかかりの金もないんだよ。

乙骨 拵えりやいや。

順介 出来る位なら……。よしんばそれだけ出来たとしても、必ず算の方で異議の申し立てをする。悪くすると裁判になる。又、金だ。それをどうするんだ？

乙骨 N・Yの方から、もう一度借りる訳には行かんのか？

順介 製作権を譲る事になるんだよ、それだと？ すると、こんだ許可は下りても、どうにも此方で仕事は出来なくなるんだよ？

乙骨 んじゃ、駄目だ。

順介 ……結局、どうしろというんだ？

乙骨 ……ええと……。

順介 駄目だ駄目だといっても、お前には考えは付かん。

乙骨 ウーム……。。

順介 俺あ、もう駄目だ。あかん。

乙骨 フーム、畜生！

順介 俺達の一生は、要するに、出来そくないだった——のかなあ？

乙骨 又いう！ よし、順介、俺達あ、闘って見よう！ 万一敗れてもかまわん、闘おう！ 敗れたら、それは俺達が悪いんじゃないやなくて、奴等が悪いんだ、世間が曲がっていやがるんだ。シャ



リになるまで、ひとつ、やって見ようじゃないか！ 此方が敗れて叩き倒されたら、俺達の死骸を見て、世間の奴が恥をかけばよい！ 順介、立って見ろ。立って、これを見ろ！ もともと、これは誰のもんだ？ 誰が作ったもんだ？ 君が作ったもんじゃないか！ 俺達が力を合せて、作り上げたもんじゃないか！

順介 うむ。

乙骨 命を掛けて、君が作った！ それが君の物でなくて誰のものだ！ 最後まで頑張りさえすれば、権利や特許はおろか、此の機械の影ぼうしまで君の物になる筈だ。こんな簡単明白な事実を、何がひっくり返し得るんだ？ 何がひっくり返し得る？

順介 その、頑張って行くだけの、資力が有れば問題ない。

乙骨 俺が嫁ぐ。俺が描くよ！ スピロヘータでもゴノコツケンでも、きやがれてんだ！ 描いて描きまくるよ、大丈夫だ！

順介 ……ありがとう、夏雄！ ありがとうよ！ ありがとう！

乙骨 泣くな馬鹿！

順介 しかし、なあ……

乙骨 しかしは要らんよ！ 箸は二本にして筆は一本なんて流儀の弱法師とは違う。乙骨夏雄何のために巴里くんだりまで行きながら、ノンノコサイサイ戻って来たと思う！ 胸裡半塊のエスプリの為だ！ 誰だと思う？! アハハハ、唯のあんちゃんど、あんちゃんが違ってたんだ！

順介 ハハ。

（鞆をかかえた筈が、黒衣着流しのまま足音を立てないで急ぎ足に階段を昇って来て、

スツと室に入る。すばやい。入口に立って二人を見ている)

乙骨 そうだろう？ アハハ、なあに……。

順介 …… (算を認めて口の中でアといって立上る) ……。

乙骨 なんだえ？ …… (順介の視線を辿って振返って算を見る) あ！ かけ……。

(短い間)

算 …… (微笑して) 今晚は。おそくあがって。ハハ。—— (相手の二人が黙っているの) いや、もつと早くあがろうと思っていたんですけどね。ほかへ廻っていたりして遅くなっちゃって (……例の通り物静かなものである。椅子にかける)

順介 …… いや、そんな事、かまわんが、工場の方の——。

算 済みません。どうもね、給料が払ってないのは、此方が手落ちなんで、強い事もいえないんでね (といいながら鞆の中から七八枚の書類を取出して、それをテーブルの上に置く) ……これなんですがね。

順介 …… 何かな？

算 一応、差し出しときます。

順介 (書類をチラと見て) 此のアパート関係の……。

算 せっかく譲り受けることにしましたが、そして今更こんな事のいえた理<sup>わけ</sup>合<sup>い</sup>のものではありませんが、事情止むを得ません。どうか元へ戻していただきたくたいのです。私の方で入れている此のユーレカ荘担保の債務は幸いまだ正式のものになっていませんし、大至急に肩代りさせときますから。いずれその方の書類もお手元へ廻しときます。

順介　しかし、そう急にいわれても、訳がわからんが……？

筧　いえばクダクダしい事になります、一言にどうしても融通が付かないのです。市場の方は話になりませんし、工場は今いった様になっていくらく、本店のオヤジは株でガツちまいますしねえ。どうも近頃の御時世というのが私達みたいな中や小の業者は生かして置かん事になって来てるようですね。ハハハ。

順介　そりや、君の方の御都合も御都合ではあらうが、今更それを此方で……。

筧　ごもつともです。しかしそれは、先日から残額の請求を毎日のようになすっているし、今日なども、お嬢さん（と突伏している亜子を横目で見て）……から催促を受けたんですが、どうにもない袖は振れません。御事情はわかっているのです。出来さえすれば何とかしたいのです。したいけれども……。

乙骨　出来ない事はなからう。誠意の問題……。

筧　それを、どうもこちらさんから槍を突かれるようにおっしゃられると、どうにも私の立つ瀬がなくなりました。でこれは一応そちらへ巻いて下さって、そして、私の方も此の際ですから、現在まで差上げた内金を、至急御返し願おうと思つて……。

乙骨　ば、ば、ば、馬鹿な。そんな変な話つてないよ！君の方で最初欲しいと……。

筧　（いきなり立上り、顔の中から飛出して来る様に鋭い眼になり此の優しい男からこんなに大きな声が出るかと思われる程、物凄い声で）小僧、出しゃばるかっ！（テーブルを叩く）うぬあ、黙つて引つ込んで居れっ！（一瞬一座がシーンとする。突伏していた亜子も顔を上げて筧を見る。順介も乙骨もびっくりして面喰い、言葉を忘れてる。乙骨の如きは殆んどアツケにとら

れて口を開けて算を見ている) やあ、ハハハ(と眼の光を柔げ、再び椅子に坐る) ……ハハハ(以前の様な静かな調子になる) ……話を急いでいるもんですからね。ハハ、いや、細かに話してもブローカ商売のやりくりの事なぞ解っていただけっこありませんから。又こんな事が解るようになっちゃ、人間おしまいですからね、ハハハ、クドクはいいません。ただ私の方もよくよく手詰りで苦しいから、こんな事お願いするんです。先ず恥さらしな次第です、どうか一つ御同情下さい。…

乙骨 ……(口の中でブツブツいう) ……そいつは、ひどい。今更、そいつを…。契約にはない。此方で不承知といえ、それつきりじゃないか。

算 (それを無視して) 本来は、今日只今、卸返し願いたいんですが、手前の我儘ばかりいっても、いろいろ御都合もお有りでしょうから、四五日待ちますから、どうかひとつ…。(乙骨の室から順一郎が出て、静かに歩いて来る)

順介 そんなことをいわれても、そう急に…

算 ハハハ、いいえ、算ともあろう男が、これだけの金の利廻りの事も考えて居られなくなっている仕儀ですから、どうか察して下すって、なるべく早いところ、ひとつ、ハハ。でない、又、これで話に角が立ちはじめると、鼠にしたって追い詰められると仕方なく爪も出さなきゃならなくなる道理で、ハハハハ(フイと笑いを止める。入口に立って、ジツト此方を見ている順一郎を認めたのである) ……。

(間——他の三人の視線も自然に順一郎の上を集る。順一郎は四人を見て黙って、掌の  
中で何か黒い物をいじくっている)

乙骨 ……あつ！ あの、引き出しから、俺の！

順介 順一！ こ、これ！

筧 ……ハハ、心外ですなあ。そういう事ならば、私の方にも……。

乙骨 順坊、危ない！ 実弾が詰っている！ 何をするんだ！ アツ！ アツ！

（此方で動き出すと、順一郎が思い切ったことをしそうな気がして乙骨も順介も動けないでいる。筧は、順一郎の手元と、青くなっている乙骨の顔を次々に見廻し、唯ならぬものを感じ不意に真青になる）

順一 ……筧さん……（薄笑いを浮べる）

（筧は、ソロソロ上半身を低くして、テーブルと順介の蔭になろうとする……）

（間）

亜子 ……順ちゃん（落着いた声である）それ、姉さんに渡して頂戴。（立って弟の方に近寄る）

順一 う？（姉の顔を見る）

亜子 渡してね、姉さんに。（順一郎、姉の眼を見ながら黙って渡す。亜子も弟の顔を見ながらそれをジャンパーの胸のポケットに入れる……）小父さんの部屋に寝ていたんじゃないの？ さ、行きましよう。（弟の背に腕を廻して廊下へ出る。言葉を忘れた様になり、それを見送っている

三人）

順一 ……姉さん。

亜子 え？

順一 姉さん。

亜子 なあに、順ちゃん？

順一 僕あ、くだらん人間だ。

亜子 いいの。

順一 姉さん。あお向けに寝てたらなあ、此方の窓からスーツと入って来て、向うの窓からスーツと飛んでった、赤いものが見える。なんだと思つたらトンボだ。

亜子 いいのよ。さ、寝ていらっしやい。（乙骨の室に入る。此方の室では三人がまだ口が利けずに居る）

筧 ……フ、フ、ソ（少し無理して笑つて見せる。それで、やつと乙骨は手の平で額の汗を拭く。順介はテーブルに肱を突いて額を抱える……）こけ脅かしはいい加減にしろい。……そこでねえ、そんな訳で……。

（乙骨の室を出て来た亜子が、室に入って来る）

乙骨 亜子……？

亜子 なんでもありません。……筧の小父さん、どうぞ許して下さい。弟は、少しどうにかしているんです。

筧 いやあ、ハハハハ。別段の事ありませんよ。そこで先刻の御話なんですがね……。

亜子 待つて下さい。腹をお立てになつては困りますけど、率直にいつてしまいます。もしかすると、小父さんの方では、父さんの今度の機械を欲しがっていらっしやるんじゃないやありません？

筧 冗談いっちゃ困りますよ。初めから一言だつてそんな事私あいやあしません。なんでそんな事いわれるんだか？

亜子　いいえ、もし、そうなら、その様な話の付け方が有ると思ったからなんですの。

筧　そうですか。しかし、今更になって、そんな話は困りますねえ、第一こんな埒クチのない事になって来ると、私の工場でいくら欲しいといったところで、引き受ける資力は有りませんよ。亜子　どうか、お願いですから。正直な事をいって下さい。お願いです。その上で、私達も、よく考えて、四方八方良いように……。

筧　四方八方に良いように？　へえそうですか。……しかし新機械を引受ける気は私の方には有りません。是非引受けて呉れとおっしゃれば、一応考えて見ない事ありませんが、果して、それだけの力が有るかないか。……とにかく内金だけは、大至急に御返し願いたいのです。契約条項を楯に取られると、事面倒になります、事実がこの通りのもので、おすがりするんですよ。私としては甚だ心苦しい次第ですが、事情やむを得ません。どうかそこん所を察して下さい上で……（尚喋りつづける）

（呻っている順介）

#### 4

#### 半月後

初秋の晴れた午前。正午近い。——全四場面を通して外光で明るいのはこの場だけである。加賀一家の住居にあてられた屋根裏部屋——従って階数をいえば三階、傾斜した天井裏が奥へ行くほど低くなって一番奥の近くでは人の頭がつかえる位である。張出され

た仕切りで二室に分れている。左側の室は八畳位で板の間になって居て前場にあつたテーブルと椅子がズツと前寄りに据えてあり、左奥の隅に機械が布でかぶせて置いてある。奥は一面の硝子窓になっている。とはいつても、その辺は床と天井の間が四尺位しかないので、窓もそれに準じて横巾ばかりのものである。晴れた空が一杯に見えている。右側の室は畳が敷いてあり、奥は窓は一つもなく、その代りに出入口のドアがある。ドアは半ば開き、その外はいきなり狭く小さい階段になっているらしい。室内にはチャブ台代りの机が一つあるきり、ダンスなどなくなっている。壁にぶら下げられている二、三の着物や洋服。二つの室には人影はない。

手に取るように響いて来るギター曲。——二階の自分の部屋で乙骨が弾いているのである。非常に永い間、誰も現れない。

ビューンと風が吹いて室が少し揺れる。

ギターの曲を縫って、やっと人の声だとわかる位に深い合唱の呼声が下の方から聞えて来る——地階よりもモット下の方からの様に。何の前ぶれもなしに、少し開いているドア口から、六七枚の請求書らしい紙片を握った女の手首が突出される——そのままジツト動かない。女はドアの陰から室内の気配を窺っているらしい。間。——しばらくして、今度はスリッパを穿かない真白な素足がスツと踏み込んで来る。全然音を立てない。……次第に姿を現わしたのを見るとお孝である。室内をグルリと見廻す。意外らしい表



情。室に入つて来て、次の室との仕切りの所まで抜き足で行き、張り出しから片眼だけで隣室を覗く。その歪んだ顔が緊張して凄い。……隣に誰も居ないので、びっくりしてキョロキョロ四辺を見廻す。急に緊張を解いて口の中でチツ！と舌打ちをする。手の請求書を見る。ドアの方へはじめて足音を立てて歩き出す。ヒョイと立寄り、何か考え、請求書を手でパタリと叩き、ニヤリと笑つて、今度はドタバタとドア口を出て階段を下へ。——その間もギターと唸声は続いている。

間。——どこかで止宿人が起き出して、うがいをしているのか、咽喉をゲー、ゲー、ゲツ！ ゲツ！ と鳴らす。

(階段を昇つて来る二人の足音)

笥の声 加賀さん！ 先生…… (入つて来る。いつもより少し青い顔。後からお孝がついて来ている。室内を見廻して) ……なるほど、……居ない……。

お孝 でしょう！

笥 するとうとうと？

孝 いいえ、ホントのさつき、戻つて来た事はホントなんですの。こんな、少し、フラフラしてね。

笥 飲んでるのか？

孝 まさか。……金が出来なかつたんですよ。こないだ中から。四人で手分けをして、親戚や友

達を、しらみつぶしに廻ってる。息子は四五日前に出たつきりだし、亜子は昨日から帰って来ないしき。フン、下の気違い絵描きだけが今朝がた腑抜けみたいな顔して戻って来てポカンとして廊下に立ってたから、いい気味だから「よう朝帰り、はばかり様！」って、背中を叩いてやったら、「お孝さん知ってるか、ボルネオには、貝殻がお金になる島があるそうだよ」といって、ニヤニヤするじゃありませんか。私は薄気味が悪くなりましたよ。それからズーツとああして弾いている。

寛 ふーん……。

孝 大丈夫ですよ。五両とお金の出来る心配はありませんから。

寛 しかし、加賀は、どこに行ってるか……？

孝 二階の便所か何かですよ。まだ何処かへ行くといってもそんな間はないんですから。

寛 とにかく、階下に来ている連中に、いきなり会わせてはならん。奴等も、間に立って利喰いをしようと掛っているんだから、機械ブローカめら！ N・Yの奴は応接に入れてるんだな？

孝 昭和の方は管理室でビールを当てがってあります。

寛 両方で出会す心配はないねえ？

孝 大丈夫ですよ。（鍵束を出してジャラジャラ鳴らして見せる）フン。

寛 少し、上手に引廻してくれ、頼む。

孝 そんな事いうと、しのぶ辺で少しおっこちますよ、フフ、つまみ食い……。

寛 仕方がない、目をつぶってるよ。

孝 まあ、にくらしい！

寛 痛い！ いや、今度ばかりは私も、一か八かだからねえ。下手をすると、いよいよ、これだ。  
孝 ちいっとバリバリおやんなさいよ。

算 手荒らな事は嫌いだ。

孝 おやおや……。そうねえ、手荒らなというんじゃないわね。

寛 だから頼む。手形が、あらかた、安井の手に寄つちやつたらしい。安井の方だつて死にもの狂いだからな。それに此の前のニューム売買の一件では俺も少しやり過ぎた。煮え湯をいくらか余分に飲ませたからな。こんだ先方でもかかつて来るよ、月末までに落さないと。

孝 本店の旦那と御同様ね……？

寛 まあね。フッフ。……しかし、死ねりや、まだいゝや。

孝 ……そいでさ、一体全体、儲けているのは誰なんだろう？

寛 どうせ大所さ。私も鉄でも一丁やっときゃよかった。とにかく、あんた早く下へ行つて、よろしく、つないどいてくれ。

孝 はい……。 (出て行きかける)

寛 おい、お孝さん、あんたあ……

孝 え？

寛 ……もう一度、出てくれる気はないかねえ？

考 ……へえ！ そいで——？

寛 助けてくれないか？ 一本だけポンと出そうという家がある。私も苦しいんで、実は濟まんが——。

孝 何処なの、それ？

寛 尾久だよ。

孝 「チョイト、兄さん」ね？

寛 まあ、しかし……。

孝 ……（暫らく黙っててから）あんた、うるさくなつたのね？ 私を捨てるのね？（泣きはじめる）

寛 いやなら、いいんだよ。

孝 子供はどうするんです？ 子供はどうなるの!! 子供は子供は……（急にヒステリックにヒーツと泣き出し、寛の足元に坐ってしまい、寛の足にしがみつく）子供はっ！ 捨てないで捨てないでえっ！（わめく）

寛 ……（困って暫く見下している。その内に、急に顔に青筋を立てて猛然と怒る）馬鹿っ！

（女の頬をピシヤリとなぐる。なぐられて急に泣声を引込めて、かじり付いて行くお孝）馬鹿っ！ 子供が何だ！（女の頭髪を左手で鷲掴みにして、引きずり廻し、右手でピシヤピシヤくらわせる。女は、最初なぐられた瞬間から石の様に黙って、ただむやみと男にかじり付いて行く）誰の子供だか、わかるかっ！ 馬鹿っ！ バイタツ！ こん畜生！（なぐる音がピシリ！ ピシリ！ と鳴る。尚も、むしやぶり付いて来る女を、一つ蹴飛ばして置いて、ドア口へ消え、ドカドカ階段を降りて行ってしまふ）

（別に痛くもないのか、泣声も悲鳴も立てず、ウソともすんともいわずに殴られていたお孝、蹴飛ばされて、坐り込んだまま暫くジツとしている、ソロソロ顔を上げて、少し

ポカンとして前の方を見ている。乱れた頭髪の下に、殴られて赤や青のまだらになって、はれ上った顔が覗ける。間——やがて、立上ってケロッとした眼で室内をひとわたり見廻し、ユックリ階下へ降りて行く)

(ギターの音が、その後チョット続き、不意に曲の途中でバーンと鳴って止む。階下で人の足音。二人ばかりの人が怒鳴っている声——その中の一人は乙骨らしい)

(間)

(階段を駆け上って来る足音)

乙骨の声 加賀！ 加賀！（ドア口に現われる）順介！（見廻す）居ない。加賀！ 順介！

(左側の室まで行って呼ぶが居ないので再び出て行きかける) ……何処に行ったんだろう？

(隅の機械を蔽うた布の下から黙ってユックリはって出る順介)

乙骨 おお！ こんな所に？ (驚ろいて見ている彼の前にやっと立上った順介の弱り果てた姿。

はかばかしく返事もせず、突立って乙骨を見ている——) 居るんじゃないか！ 何故返事をしないんだ？

順介 ……なんだ？

乙骨 なんだたあ、なんだ！ 下にN・Yの人と昭和の人が来ているから、早く来い。お孝の奴、君が見えないというもんだから、どんなに心配したか知れやしないぜ。さ、早く来い！ 筧やお孝などが又くだらない水を差さぬ内にとにかく会わなきや駄目だ。なに？ どうしてカブリを振るんだ？ そりや、そりや、金はない、金は出来なかったさ。(自嘲) ハハ、俺なぞ、昨日から駆けずり廻っても十円が一円も出来やしなかったからな、驚ろいたよ。ハハハ。しかし、N・Y

の方だつて昭和の方だつて、貸した金を返せとはいっているが、元々それが眼目じゃない。欲しいのはこれなんだから、そのために金の催促もする訳なんだから、話の運び次第で、どうにでもなる！

順介 どうにもなりはせん。

乙骨 なぜ？

順介 かりに、そうするとする。職工達の方はどうなるんだ？ ……まだ騒いでいる。いや、益々ひどくなつて来ている。それが万一向まく行つたとしても、今度は算の方の内金をどうする？

乙骨 ……ウム。 ……ウム。

順介 君あ、借り物のケンビ鏡まで殺してしまった。亜子は弁護士へ行つてくるといつて出たが、帰つて来ない。弁護士も弁護士だろうが、親戚中を又駆け廻っているんだ。順一郎は黙つて出て行つたきり、もう五日も戻らぬ。順一はホントに俺を憎んでいるよ。こないだ喧嘩をした時、あれはホントに俺を殺す気でいたんだ。俺にや解つていた。それが当然だ。 ……俺あ、悪漢だ！俺あ、階下へは行かない。

乙骨 行かないといつたつて、 ……そんな君！

順介 行かん。 ……ああ！俺が一つの道に踏み込むと、忽ちその道は針の山になるんだ。

……俺が御馳走を食べようとすると、忽ちその御馳走は苦くなる。俺という人間は何かしら都合な人間なんだ、生きていると。その辺一帯の調子が狂つてしまう。俺あ近頃自分が怖くなつて来た。

乙骨 今更になつて何を寝言をいつているんだ！ 順介！ 命の有る限り、やつて行つて見よう

と誓い合っただのを、忘れたのか？ あれはホンの半月前だったぞ！ こんな事位が何だ！ 俺あ、俺あ……。とにかく未だ俺達の命は有る！ 生きている！ やるまでじゃないか！ な！ な、

順介！ ミドリさんが俺達には付いているんだ！

順介 ……（倒れかかる様にして、乙骨を抱く）……ああ、ミドリ！ 俺達はまだ生きているよ、ミドリ！

乙骨 そうだ、生きているんだ！ ハハハ、（笑い声が少しヒステリックだ）まさか、どんな奴だって、殺して取って食おうとはいやあしない。もつとも、取って喰いたけりや、喰え、さ！ やるまでだ！ さあ行こう。順介。それに、奴等の事だ、此方から降りて行かないでいれば、その内此処にあがって来る。

順介 夏雄、彼奴等に此の機械を見せたくない、彼奴等には、見せたくない。

乙骨 だから下へ行こうよ。

順介 じゃ、行くから、お前も一緒に来てくれ。

乙骨 勿論だ。

順介 そいから、お前の、ピストル貸してくれ。

乙骨 え？ どうするんだ？

順介 ただ、何んだか持っていたいんだ。その方が気丈夫だ。どうしようってんじゃない。ただ持っていたい。

乙骨 ……そうか。しかし、あれは、先だって以来亜子がポケットに入れていて離さない。順坊が又あれを持つと危ないという……。

順介　じゃ、行こう。

（ドアへ向って行きかけて、互いに、乙骨は順介の肩を抱え、腰介は乙骨の腕を掴んで、三四歩歩いて、乙骨が突然、足を床に蹴つまづいた様な具合で、ヨロヨロとして倒れかかる、口では強い事をいつているが彼も順介同様、非常に弱っているのである）

順介　どうした、夏雄？（支えてやる）

乙骨　なんでもない！　うん！（二人出て行きかける）

（ドアから、寛がスツと入って来て、二人の前に立つ。チョットの間、二人を見ていた後で急に床の上に坐って頭を畳に付けんばかりに下げる）

乙骨　……（呆れて）……な、なん……？

寛　（これまでは全然見られなかった、且、全然彼から予期する事の出来ない様な哀願である）  
……加賀先生！　クダクダしい事はもう何も申しません、この通りです。お願いします！　お願いです！　どうか、機械は私の工場の方へ入れさせて下さい。どういふ事でも致しますから、どうか一つ……。

乙骨　……（驚ろいている）　へっ！　き、き。

寛　ほかへ持って行かれると、私の方はつぶれます！　どうかそれを考えて下さい。工場はもともと先生が創立されたものでありませんか。それが、根こそぎ、つぶれてしまいます。

乙骨　……そ、そ……それは初めから此方から頼んでいるのを、君の方で。

寛　（押しかぶせて）　いいえ、従業員もそれを心配してあんなに騒いでいるのです。もう私の手に負えません！　お願いします！



順介 ……（これは驚ろくというよりも、余りに思いがけない態度に出られて、殆んど恐怖の顔色をみなぎらせている） ……し、し、しかし…

筧 お問い合わせします！ お問い合わせします！ この通りです、先生！

乙骨 し、し、し、信用出来ない！（順介に耳打ちする）

順介 ……（耳打ちを聞き終ってから） かしなあ、筧君、たとえ君の工場に入れるにしても、職工を整理するんだと？

筧 いいえ、それは断じて、しません！ 保証します！ お約束します！

乙骨 とにかく、下へ行こう。

順介 だが、N・Yとは契約済みになっている。昭和からも金が借り入れてあるし。 ……もつと早く、そういつて呉れると…

筧 出来たら、今うちで使っている機械を原発明、今後の先生のを追加発明として出願して下さいませんか？ いいえ、それは出来るんです！ 私がチャンと弁理士の方に聞いとききました。いかがでしょう？ 勿論そうなれば私との共同出願という事になりますけど。そうお願い出来たら一切合切のうるさい事は私の手で運びますとも。どうか、ひとつそんな事をお願い出来ますまいか？ いいえ、私を今度こそ信用して下さい！ ね、先生！ とにかく、とにかく、私の方にそんなつもりが有る事を忘れないで居て下さい。万事その積りでN・Yとも昭和とも話を運んで下さい、お願いします。

順介 それは、よい、しかし…

乙骨 下へ行こう！

(乙骨は順介の肱を掴んで促し、立ってドアの外へ。それを追って尚もペコペコしつつ  
篋も消える)

(永い間——風の音。屋根の辺でギーギーギツときしむ音。窓の上の辺がメリツと板が  
鳴る。窓硝子を上の上——屋根の上から——さかさまになってチラツと室内を覗き込ん  
だ人間の顔の様なものが見えて、直ぐに引込む)

(階段に足音がし、疲れ果ててションボリ亜子が帰って来る。右手に一升買いの米のフ  
ロシキ包みを下げ、黙って入って来て、包みを小机の上に置き、そこに坐って四辺を見  
廻しなどしている)

亜子 ……順ちゃん。 ……お父さん …… (返事がないので誰も居ないと知り、変に思つて、隣室  
の機械の方をチョット振返つて見てから、小机に両肱を突き、暫くボンヤリしているが、疲れて  
いるので、ウトウトしはじめ、やがてグッタリと突伏してしまふ ……)

(間——窓硝子から、再びチラツと覗く人の顔、今度は上からでなく、窓の横から。男  
の顔。直ぐ引込む)

(階段にトントン足音がする。順一郎が現われる。頭の繃帯はもうない。その辺を見廻  
し姉の方へ近寄る)

順一 ……姉さ—— (呼ぼうとして止す。姉がくたびれて眠っているのを知つたのである。小机  
の上の米包みを見る。隣室を見る。そして再び立ったまま姉の姿をジツト見下している) ……

亜子 …… (うわごと) う、う、助けて、下さい! あっ! うーん! (夢中で唸る。その自分  
の唸声に驚いて我に返る) え? なあに? (四辺を見廻す) ああ順ちゃん。 (自分を見下ろして

いる弟を見上げて笑う) 私、眠っていたのかしら？　いつ帰って？

順一　たった今だよ。

亜子　どこに行ってたの？　心配させるもんじゃなくってよ。パイと出たつきり、五日も六日も帰らない。どうしたのかと思った。父さんなど、順はもう戻っては来てくれまいかって日に三度も四度も聞いてよ。

順一　姉さんも今帰ったのか？　そいで弁護士の方は？

亜子　駄目、今日で三度行っただけ。この前の料金払ってないから。事情には同情しますが、当方も職業ですから……。フフ、無理ないわ。

順一　金は？

亜子　出来るもんですか。(米包みを持ち上げて見せて)牛込で貸してくれたので、こいだけ買ったら、パアよ。電車賃も残らないから歩いて来た。ハハ、おおくたびれた。

順一　ふん。……(ふところから紙幣を一枚出して、小机の上に置く)これあげる。

亜子　へ？　……どうしたの、これ？　五円じゃないの？　どうしたの順ちゃん？

順一　あの食堂へ行っただ。前借りして来た。

亜子　へえ　じゃ、行って呉れたのね？　順ちゃん、ありがとう！　ありがとう！　いいえお金はどうでもいいの、あんたがそんな気になってくれたのが私、ありがたい。

順一　とにかく、一番つらい仕事させて見て下さいといった。そいで、五日間釜焚きをさして貰って見た。そしたら、やれるんだ。……僕にもやれるんだ。腰はメリメリ痛いけどね。やれる。

……僕あ何だか不思議な気がしたよ、姉さん。……僕あまだ子供だなあ。

亜子 ……そう！　　そうよ、　　そうよ！

順一　いくら何でも釜焚きは、　　といってね、　　先方では皿洗いをさせよう……その方だと月給も十五円だという。　　しかし僕は、　　釜焚きをやらして下さいと頼んだら、　　先方じゃ喜んで、　　では現在の釜焚きの人を皿洗いに廻すから、　　明日から直ぐ来てくれ。　　月給は十円。　　食うのは勿論先で持つ。

亜子　　じゃ、　　住込みね？

順一　　向うじゃ、　　どっちでもいいというんだ。　　住み込みに決めて来た。　　……此処にや、　　どうせ僕は居れん。　　もう、　　ごめんだ。　　……父さんは勝手になんでもすればいい。

亜子　　……んじゃ、　　行つてしまふのね？　　順ちゃんが行つてしまふ。　　……仕方がない！　　そいで……明日っから？

順一　　今日、　　直ぐ行くんだよ。　　着物と、　　そいから、　　姉さんにさよならいおうと……。

亜子　　うん、　　……（悲しみをはねのけて）　　そう、　　それがいい！　　おひる未だね？　　そう、　　じゃ御馳走してあげる。　　待つてて頂戴。　　腕にヨリを掛けて……フフ、　　といつても、　　これと、　　さ、　　そいからタクアんと、　　ああ、　　まだシヤケが有つた！　　待つててね、　　下でチヨイと炊いて来るわ！

（立上る）

順一　　僕が炊いて来るよ。　　姉さん疲れてる。

亜子　　いいの、　　どうせお昼の仕度をするんですもの。　　そういえば、　　お父さんや乙骨の小父さん、　　何処へ行つたんだらう、　　もう戻つて来てる筈だけど……。　　工場かな……？

順一　　まあ、　　僕にやらせなさい。　　やりたいんだ。（米包みを取つてドアの方へ）

亜子　　じゃ、　　やつて貰うわ。　　もし下に父さんや小父さん居たら、　　そういつてね、　　御飯ですつて。

順一 ああ……（歩み戻って来て、姉の顔を見る）……姉さん。……僕、もう一度、どうにか生きて行けそうな気がするよ。自分の弱さや、馬鹿さを隠す必要はないや。簡単明瞭にやればよい。僕あね、ちかごろ、お父さんの事をやっぱり、すぐれた人間だという気がしはじめて来たよ。そこから、姉さんが、謙さんを好いてる気持が少しばかりわかりわかつて来た様に思う。早くいい子を産みな。姉さん。アハハハ、男の子がいいや。早く、見たい。

亜子 ありがとうよ、順ちゃん。

順一 もう一度、やって見る。……姉さんの顔を僕あ、ズツと見て来たんだ。……姉さんと、母さんだ。……手を出してごらん、姉さん、手を出してごらん。……この手だ、この手だよ。これは母さんの手だ。（亜子の両手を掴んで、その掌に自分の鼻を近寄せて匂いをかぐような事をする。自分の頬をそれで撫でて見る。果ては自分の頭を、姉の胸にこすりつける）

亜子 （黙ってされるままになっているが、グーツとこみ上げて来るものあり）ウフン……。あ痛っ！

順一 何だよ、これ？

亜子 馬鹿ねえ、痛い！（ジャンパーの胸から先日の子銃を取り出す）これよ。

順一 まだ持ってる。……（気を変えて）じゃ、直ぐ炊いて来るよ。（ドアの方へ）

亜子 ……父さんや、小父さん、下に居たら、そう言ってよ。（階段を小走りに降りて行く弟を見て、立ったまま、しきりにクフン、クフンと鼻を鳴らして自分を押えようとするが、どうしても制しきれない）馬鹿。クフン……。手のピストルを見る。顔を上げ、何となく少しぼんやりして

前の方を見ている)……クフン。

(その間に、隣室の窓が、スーツと外から開いて、人が入れる位の大きさに開き、次に、外の樋につかまった男が、職工服を着た足の方から入ると、す早く床の上に立った男の顔を見ると、謙五である。外からうかがっていて、順一郎が出て行ったのを、順一郎と亜子二人とも出て行ったものと思ひ込んでしまったらしく、且入って来て見廻しても、隣室の亜子の立っているのは見えない様な位置になっている。——黙って機械へ近づく。少し布をめくってジツと見詰めながら、側に立てかけてある鉄のロットを取上げ、振って見たりする)

(亜子、人の気配を感じヒョイとその方を見る。魅入られた様に茫然と機械に見入って立っている謙五の姿)

亜子 ……あっ！ ああ！ 謙五！ 謙さん！ (三四歩隣室へ) 謙……いけないつ！

謙五 おお！ (二人そのままの姿勢で一瞬見詰め合う) ……

亜子 父さんの！ 父さんの……！ (と亜子が叫んだ瞬間に謙五のロットが無意識に落ちて機械の端の所を叩く。その音と同時に、ダン、ダン、ダ！ と爆音が響く)

謙五 あっ！ 危ない！ 亜子っ！ 亜子っ！ (いっている間も、亜子の手のピストルは発射される。ダ、ダ、ダ！ と発射し尽し、フラフラになって、亜子倒れる) ……亜子っ！ (走り寄る)

亜子 ……駄目！ 謙さん！ 父さんの機械、こわしては……謙さん！

謙五 (左手を撃たれたらしいが、それを考える暇もなく) 亜子！ どうかしたかっ？ 亜子！ (亜子を介抱し、抱き起そうとする) 工場の者あ、みんな仕様がなくなつたんだ！ 俺あ……俺あ、

何も、そんな気はないけど、……みんなに、うらまれて、どうにも……（いつている間に、音を聞きつけたものである、誰かが階段を駆け上って来る足音）来た、誰か！ 亜子さん、かんべんしてくれ！（というなり逃げにかかる）

（ドアから飛込んで来る順一郎。飯釜のフタを握ったままである。謙五、窓から外に出て、樋を伝って下へ消える）

順一 ああ！（室に走り込み、姉をチラッと見、バリバリと音のする窓の所へ行き、下を見る）  
おお、謙……。……（姉の所へ寄って来て）どうしたんだ、姉さん？（殆んど人事不省に陥つて、のめっている姉を見て立つ。永い間。姉の手にあるピストルを見、それから、投げ出されているロッドを見、それから窓を見る）

亜子 ……（うわ言の様に） 父さんの機械……。謙さんが……

順一 ……（突然事態がわかってチョットの間、石の様になって立ちすくんだ後、急に持っているフタを放り出し、懐中から手拭いを出して、床の上に点々としている血をすばやく拭きつつ窓近くまで行き、拭き終って、窓からもう一度下を覗いて見てから、姉の傍に戻って来て姉の右手指をこじ開けるようにしてピストルを取り、側のテーブルの上に置く。姉の身体を抱き上げて、隣室の畳敷の方へ連れて来て、座蒲団を枕にかけて寝かせる。それらの全部が非常にすばやく、黙ったまま行われる）……。姉さん。……。額にさわり、胸を少し開いてやる。死んだ様になった姉を、黙って見詰めている）

（階段を急いで登ってくる足音。乙骨が真青に昂奮して入って来る。左手にギターを鷲掴みにしている）

乙骨 どうした、今の音は？ おお、二人とも帰っていたのか！ どうした亜子？ どうしたんだ、え、順坊？

順一 疲れて、気分が悪いというんだ。

乙骨 今の音は、何だ？

順一 何だ？

乙骨 えらい音がしたじゃないか。ピストルの音の様に聞えたもんだから、俺びっくりして。

順一 ううん、僕が、物を落としたり。

乙骨 そんなじゃない！ お前また……。 (と急いで隣室へ行き、機械を見る。無事なのを認めて、キョロキョロするが、ロッドの放り出されているのを認めて) ああ、これを床へぶつけよったな。

順一 父さんは、小父さん？

乙骨 加賀の耳は、つんぼになっているから、聞こえはせんよ。

順一 階下？

乙骨 うん。地獄だ！ 地獄で責められてる。鬼共にな。

順一 奴等が来てんのか？

乙骨 N・Y、昭和、それに寛！ お孝までが近くをウロウロしているから、女鬼まで居る訳だ、役者は揃っていやがらあ！ 加賀あ、もう訳がわからなくなっちゃまって、コメカミから油汗を流してるよ。畜生！

順一 ギターどうしたんだ、小父さん？



乙骨 え？ ああ、なるほど。なあに、先刻、降りて行ったら、お孝の奴、これを持って玄関の所で立つてるから、どうしたかというと、いつまで経っても滞った間代を払ってくれないから、これを売るんだといやあがる。それで、取戻してこうして持つてるんだ。たまるかってんだ、俺の大事な大事な此奴をまき上げようたって、女鬼め！（寝ている亜子が少し元気になって身じろぎをする）おお亜子、どうしたで 亜子！ 亜子！

順一 静かにさせといた方がいいよ。

乙骨 無理もないや、無理もない。気分も悪くなる。こないだからのゴタクサでは、大の男でさえ、クラクラしてしまうんだ。俺の頭もどうにかなくなっちゃまった。加賀は、もしかすると、今に気が狂うぜ。いや、もう今頃は狂ってるかも知れん。ああ！ ああ！ ああ！

亜子 ……小父さん、階下へ……父さんの所へ早く行って頂戴。

乙骨 お前は口をきいてはいかん。

亜子 どんな目に会わされるか、知れない、お願いだから、小父さん！

乙骨 俺は、行きたくない。見ちゃ居れんのだ。また、行っても、どうしようもない。俺が居ると却って段々まずい事になるんだ。

順一 どうしようってえの、全体？

乙骨 何が何だか、解るもんか、三人三様にガアガアいやがって、しまいにはドナリ立てはじめる！ 権利がどうの、先取得権がこうの、契約がああので、奴等のいつてる事なんぞ、神様だけにしか、わかりはせん！ 権利か？ ふん！ 権利ならピンからキリまで加賀順介の物じゃないのか？ 命を打込んでそれを創った人間の物じゃないのか？ 法律というものは、人から、当然

の所有権を剥ぎ取るための道具なのか？ 馬鹿野郎、勝手にしゃがれ！

順一 怒って見たって仕様がなないよ。そいで結局三人の奴、どうしろっていうの？

乙骨 結局もへチマもあるもんか、そいつは始めからハッキリしてる。一番安い金で機械を自分が手に入れようというのだ、そいだけはハッキリしているよ、ハッキリしているのは、それだけだ。あとは、何が何やら解るもんか、一緒に喋り出すんだ。……悪い事には、加賀の奴、あっちからも此方からも少しずつ金を取っている。それで事柄がコングラがる。

亜子 ……父さんが悪いんじゃない！ どうにも要るもんだから、仕方なく。……父さんの罪じゃない。

乙骨 ……そら、そうだ。

(間)

(階段に、急いであがって来る足音)

順一 誰？

(返事なく、閉ったドアに外からドシンとぶつかった音がして、静かになる)

(三人顔を見合せている。起き上る亜子。しかし直ぐめまいを感じて、又横になる。

——間

(順一郎、ツト立って、ドアの方へ行き、ノックを握って、チョット立っていてから、開ける。トタンに、外からよろめき込んで来る順介。それまでドアに顔を付けて寄りかかっていたらしい。どんな目に会ったのか、更にゲツソリと青ざめ疲れ、フラフラになり、ひどい病人の様になっている……倒れそうに、はずみを喰ってヨロヨロと四五歩入

つて来て、自然に乙骨と娘を認め、ジツと立って二人を代る代る見る)

順介 (何かいいそうに口を動かしかけるが、声が出ない) ウン…… (ヨロヨロと歩いて隣室へ)

(順一郎が「父さん!」と呼びかけそうにする)

(それを押し止める乙骨)

(順介、板の間のテーブルの傍まで行き立止り、隅の機械をボンヤリ見詰めていた後、手さぐりで椅子の背を掴み、やがて掛ける。低く一声唸ってテーブルに突伏す)

(それを見守っている三人)

乙骨 …… (順一郎に低く) ソツとして置くんだ。

(間)

亜子 …… 順ちゃん。 …… あたし、チョツト、謙さんとこい行って来る。

順一 どうして? …… いいよ。いいよ。僕が、後で行ってあげる。話せばわかる。ほかの連中だって話せばわかる。ホントは機械を憎んでいるんじゃないんだ。大丈夫だ。何もありません。謙さんにも皆にも俺が後で行って話す。

乙骨 なんなんだ?

順一 ううん、何でもないんだ。

亜子 …… 後で行ってくれるといつても…… あんた、食堂の方へ、もうソロソロ出かけないと。

順一 まだいい。

乙骨 どっか行くのか、順坊?

亜子 働き口が有ったの。

乙骨 そりやいい。そう！ そいつはすばらしい！

亜子 ……（弟に）だってさ、早く行かないと……。それに、行ったきりになるんだから、仕度もしないと。

乙骨 行ったきり？ 行っちゃうのか？

（三人の交す言葉は低い）

（こちらの室では、突伏していた顔をソロソロ持ち上げた順介が、ボンヤリした眼で正面を見守っている。次第に眼が光を増して来る。手は無意識に、先刻順一郎の置いたピストルをいじくっている――）

（間）

（階下にドヤドヤと三四人が一階から昇って来た足音。鋭どく何かいい合いながら。女の声が混っているのはお孝である。順一郎、ドアをもう少し開ける。そのため下の声ははっきりきこえる。男の声「どこに隠したんです！」。他の男の声「出したまえっ！出せっ！」。笥の声「まあ、まあ、あんた！ くら！」。お孝の声「私の家ですよっ！私のアパートの中で勝手な真似は――」。二階の廊下の角の方で押し合いながら論争しているらしい）

順一 （ドアを閉める） ……来やがった。

順介 ……（不明瞭にブツブツいう） 来やがった。

順一 ……（亜子の方へ少し寄って） 僕あ、姉さん、行くのよした。

亜子 どうして？

順一 僕あ、此処に居なきやならん。僕あ、みんなと一緒に居るよ。一緒に居て、僕あ見ていよう。見なきやならん。見たって僕には何も出来はしないだろうけど、それでいい。見ていたい！いいや、食堂の方は通いで勤めてもいいと向うでいうんだから。……僕あ、やっぱし、父さんの息子だ。

亜子 順ちゃん……。

(順介が、ピストルを右手で頬の所に構える。銃口は正面をねらっているのである)

順介 ……来やがった。……貴様達が悪いか、それとも、俺が悪いか。どっちかだ。……貴様達が死ぬか、俺が死ぬか。どっちかだ。フン……。 (左の目をつぶってねらう)

(階下の論争と入り乱れる足音はドアが閉められたために明瞭には聞きとれなくなったが、続く。ばかりでなく、次第に近づいて階段の真下のあたりにきこえて来る。——それに耳を澄まして沈黙している右の室の三人)

(永い間)

順介 …… (はじめて言葉らしい言葉をいう) 夏雄！ 夏雄！ 夏雄！

乙骨 (そつちを見ないで) なんだ？

順介 ギターを弾け。

乙骨 ……なに？

順介 ギターを弾け。

乙骨 ……フツ！

順介 弾けといったら、弾かんか！

乙骨 (口の中で) 勝手にしろい。…… (ギターを弾く)

順介 歌え! 大きな声を出せ!

乙骨 (泣き声で) 馬鹿野郎!

順介 「恋人たずねて」だ!

乙骨 畜生! 恋人——たずねて、山を越える! (歌う。調子も何もなく、ただメチャメチャに高い、咽喉の張り裂ける様な甲高な声で)

順介 ……山を越える (小さな声で歌いながら、ヨロヨロ立上り隅へ行き、機械をためつすがめつ見ている)

乙骨 (もう一度はじめから、やり直して) 恋人、たずねて、山を越える。遠くの谷間にも一人いるよ。

順介 ……たずねて、山をこえ……も一人、いる。(放り出してあるロッドを掴み、持ち上げて振っている) ……ミドリよ! (いったと思うと、やにわにロッドを振り上げて、機械の上に打も下ろす。ガ、ガ、ガ、チャリン、チャリンとひどい音。続けざまに、殆んど自分の身体に残っている最後の力をふるって打ちおろす。鉄部と木部とが、こわれ飛び散り、ガシヤ、メリメリツ、ガ、ガ、ガツと破壊される)

順一 あっ! (隣室へ飛んで行く)

乙骨 おおっ! (続いて走り込む)

亜子 あ! (起き上って行こうとするが、再び眼まいで、突伏してしまう)

順一 父さん! 何を、何をするんだっ! (父の腕を掴んでとめる)

乙骨 な、な、な、なつ、何をするんだっ！ 順介！ 順介！ な、何を……

順介 （意外に静かな声で）フン。まだ、こわせるだけの、力は有った。

乙骨 き、き、貴様あ、気が狂ったのかっ!!

順介 ……うん、狂った。

（呆然として順介を見守る乙骨と順一郎）

順介 ……これで、いいんだ。（不意にグタグタと前に倒れかかる。驚ろいて抱きとめる乙骨。

順介の身体を支えつつ立ったまま、ヒーツと男泣きに泣き出す乙骨。号泣の果ては、破れかぶれの笑い声とも泣き声ともつかなくなる）（間）

（その間に階下の四人は、階段を昇って来て、ドアの直ぐ外で、互いに罵り合っている声がする。「優先権の問題じゃない！」「家宅侵入だっ！」「債務の事を俺は知っているんだっ！」「何をしゃがんだっ！」等。最後の声は、お孝の金切声である。ピシと音がして、誰かが誰かを殴ったらしい。「畜生！ 殴ったな！」と男の声、ドタバタという騒ぎである）

（順一郎がドアの方へ行く）

順介 ……入って来い、入って来て見ろ。もうないんだ。ハハハハハ。ハハ。

順一 姉さん！ いいよ、俺がやる！ 俺がやる！ 俺あ父さんの息子だ！

順介 （身体はグツタリと乙骨に抱かれたまま、乙骨の肩にもたせかけている首だけ上げて）人間の性質を根こそぎ、なおすか。それが出来なきや、人間を絶滅させるんだ。俺が今度はそんな機械を発明してやる。発明してやるから、待って居れ。

順一 姉さん、父さんの凶面はチャンとしまつて有るね？ 凶面は有るね？（突伏したままコックリをしている亜子）じやいや。俺が相手になる。姉さん、黙っているんだぜ！（ドアのノックを掴む）

順介 ギロチンというものが有ったな、夏雄？ あれは、素晴らしい機械だぞ。あれを発明した奴の心持が、俺にはわかる。やっとわかった。ギロチンを持って来い。

亜子 ……順ちゃん、危ない！ 出て行っちゃ…。

順一 なあに、いいさ！ 手出しをするんじゃないよ。（出て行くために、ドアの外では、取組合いになったらしい物音。「畜生っ！」「野郎！」「畜生！」「ヒイツ！」と叫び声）

順介 ……貴様達、待ってる。そいつを俺が発明してやる。しないで置くもんか。しないで置くもんか！ ギロチンを！ ギロチンだ！

（ドアの外の取組みは益々ひどくなり、同時にかなり疲れて来たらしく、もう声は立てないで、ビシリ、ビシリ、バタツ、バタリ、バタリと音だけ。時々ドシンとドアにぶつかり板がメリメリメリと鳴る）



底本.. 「三好十郎の仕事 第一卷」 學藝書林

1968 (昭和43) 年7月1日第1刷発行

初出.. 「文芸評論」

1935 (昭和10) 年9月号

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年6月15日